都城特攻振武隊慰霊碑「はやて」のくり抜き
「火の玉」「打って一丸」を意味し、石より硬い信念を貫いた人々を象徴している。（６ページ参照）

会報 特攻

平成29年８月

第１１６号

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
〒102-0073
東京都千代田区九段北3-1-1
靖國神社遊就館内・地階
電話　03（5213）4594
FAX　03（5213）4596
http://www.tokkotai.or.jp
振替口座　00140-6-59580
編集人　金子敬志
発行人　石井光政
印刷所　ﾖｼﾀﾞ印刷株式会社

目次

暑中お見舞い申し上げます・・・

暑中お見舞い申し上げます

公益財団法人　偕行社

会長　志摩篤
理事長　冨澤暉
副理事長　塩田章
副理事長　深山明敏
副理事長　白石一郎
副理事長　大越兼行
専務理事　小柳毫向
事務局長　若木利博

公益財団法人　水交会

会長　藤田幸生
副会長　古庄幸一
理事長　齊藤隆
副理事長　加藤保
専務理事　赤星慶治
事務局長　本多宏隆

公益財団法人
大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

会長　島村宜伸
理事長　柚木文夫
専務理事　圓藤晴喜
事務局長　岩田司朗

航空自衛隊退職者団体
つばさ会

会長　外薗健一朗
副会長　岩﨑茂
副会長　溝口博伸
副会長　戸田眞一郎
副会長　片山隆仁
副会長　鹿股龍一
専務理事　吉岡秀之

公益財団法人　隊友会

会長　藤縄祐爾
理事長　先﨑一
常務理事　増田好平
常務理事　吉川榮治
常務理事　外薗健一朗
常務執行役（総務担当）　久納雄二
事務局長　植木美知男

東郷神社

宮司　福田勉

東郷会

名誉会長　東久邇信彦
会長　友國八郎
副会長兼編集長　田内浩
事務局長　伊藤和雄
事務局長　足立晴夫

公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会

会長　杉山蕃
理事長　藤田幸生
副理事長　岩﨑茂
専務理事　衣笠陽雄
事務局長　石井光政

神雷部隊慰霊祭に参列して

副理事長　岩﨑　茂

平成28年度の神雷部隊慰霊祭は、今回も平成29年３月21日に湘南水交会主催で神奈川県鎌倉市の建長寺内「正統院(しょうとういん)」で執り行われた。言うまでなく、３月21日は神雷部隊の最初の特攻が行われた日である。

早朝からの生憎の雨にも関わらず、湘南水交会のメンバーを中心に60名以上が参集され慰霊祭が執り行われました。参集された方々を拝見するに、ご遺族やご同期、友人等のかなりのご高齢の方々がおられましたが、見覚えのある現役自衛官や元自衛官に混じり若い一般の方々も散見された。

慰霊祭は予定どおりの時間に開始され、厳粛な中、黙祷、正統院ご住職 雪 文庸(すすぎ ぶんよう)様の読経、参集者全員での御焼香、そして最後にご住職による説教で終了し、慰霊祭後の懇談となった。懇談では湘南水交会の植月会長の挨拶、海兵73期中島様(92歳)からお言葉を頂き、引き続き私も特攻隊戦没者慰霊顕彰会理事長代理として挨拶をさせて頂いた。

神雷部隊が建長寺正統院に祭られた経緯は、既にご案内のように、神雷部隊の隊員であった竹内氏が建長寺正統院ご住職となられ、多大なご尽力により正統院墓地背後の洞窟内に神雷部隊を祭る祠(記念碑)が建立され、昭和40年３月21日に除幕式が執り行われ、慰霊祭が始められたことによる。本慰霊祭は、もともとは鎌倉水交会が昭和48年、総会を正統院で開催されたのを機に、以降、鎌倉水交会が主催し毎年執り行われ、平成14年に鎌倉水交会が水交会と合併した以降は、現在の湘南水交会が主催している慰霊祭である。

冒頭で記述したとおり、ご遺族や元隊員のご高齢に伴い、参加者が激減したものの湘南水交会のご努力により若い人達への勧誘もあり、他の特攻慰霊祭に比較し参加人数は少ないものの、今後も安定的な運営が可能と考えられる。今回は、特攻隊戦没者慰霊顕彰会からは私のみの参加でしたが、神雷部隊慰霊祭に対し、顕彰会としてもしっかりとした支援を行うとともに、湘南水交会と連携を取っていくことが大切と考えます。

参加者全員による集合写真

平成29年度豫科練雄飛会慰霊祭に参列して

評議員　原島淳子

平成29年4月3日（月）、靖國神社で執り行われた「平成29年度豫科練雄飛会慰霊祭並びに招魂観桜祭」に特攻隊戦没者慰霊顕彰会の代表として参列させて頂きました。

満開に咲いている桜のもと、10時半の受け付け開始時間前より参列の皆様の姿が見られ、年に一度の雄飛会の慰霊祭でお仲間に会えることを楽しみしていらっしゃるのかと、嬉しそうな笑顔を拝見し、桜も満開で出迎えてくれたこともあわせ、私も嬉しくなりました。

受付の後参集殿に集合し、病気欠席の小林和夫会長代理のご挨拶後、参進・手水を終え、23期保坂俊雄副会長率いるスカイマスターズの生演奏に迎えられながら拝殿に着席し慰霊祭典となりました。

慰霊祭典は、国家斉唱から始まり、修祓・献饌・神官による祝詞奏上と式次第に沿い粛々と進められました。

次の祭文奏上は、21期早川昭二氏が小林会長の言葉を代読し、「昭和33年に発足した雄飛会も60年を過ぎ、会員全員高齢の老体化となったけれども、これからも、潔く散華した仲間の慰霊は元より、豫科練の事を後世に伝え続けていく」と言う想いを述べられました。

続いて献歌「海ゆかば」を全員起立で奉唱した後本殿へ昇殿しました。

本殿では、御遺族・来賓等による玉串奉奠の後、「国の鎮め」の奉奏を背後に聞きながら黙祷をし、徹饌の後慰霊祭典は滞りなく終了致しました。

本殿退下の後、靖国会館前庭に移動して行われた記念写真の撮影。本年も23期渡辺勲氏の持つ大きな豫科練雄飛会の旗がたなびく中で撮影が行われました。そしてまた、以前と同じく一陣の風と共に沢山の桜の花びらが舞い落ちてきたのです。その花びらに「お帰りなさい」とつぶやいたのは、私だけではなかったと思います。

２３期渡辺薫氏

記念撮影後は靖国会館２階「偕行の間」で招魂観桜祭となりました。

開会挨拶の後、御遺族・来賓の紹介及び挨拶が行われ、18期矢野昭氏による、「嘗ては１期生も教官も出席していた。今日は楽しく語りましょう」と言う挨拶・献杯と続き、スカイマスターズの生演奏を聴きながら懇談し、「若鷲の歌」を始めとした軍歌を演習した楽しい一時を過ごしました。

中でも、スカイマスターズの一員としてトロンボーンを吹いていた、漫才師おぼん・こぼんのこぼんさんによる特別な余興には大いに笑わされ、ひときわ楽しく過ごせた事と思います。

そんな観桜祭も和気藹藹のうちに定刻となり、来年の再会を期してお礼の言葉で閉会となりました。

軍歌演習

「今年は参加者が少なくなったねえ」とお話している声が聞こえてきました。

確かに皆様ご高齢になり、年々参列する事が難しくなってきているのだと思います。そんな声を聴くと寂しさが募りますが、来年もまた皆様がお元気な姿で在天のお仲間に会えます事を心から願って止みません。

そしてまた、童顔の豫科練というさきがけとなった方々がいた事を、忘れることなく語り伝えていきたい・いかねばならないと改めて強く思いました。

最後に、この句を捧げます。

満開に　咲きし桜の姿にて
友にまみえし　靖国のもと

スカイマスターズ

第四十一回都城市特別攻撃隊戦没者慰霊祭に参列して

専務理事　衣笠陽雄

平成29年4月6日、宮崎県都城市 都島公園（旧陸軍墓地）内慰霊碑前に於いて実施された「第四十一回都城市特別攻撃隊戦没者慰霊祭」に顕彰会を代表して参列したので報告する。

一　慰霊祭の状況

ここ慰霊碑のある都島公園は、旧日本陸軍歩兵第23連隊関係の英霊が祀られている旧陸軍墓地であり特攻関係以外にも種々の慰霊碑が建立されている。桜並木もあったが今年は開花が遅れ残念乍未だ二～三分咲きの状況であった。又雨模様であったが碑前には準備宜しく大テントが設置され諸準備万端整っていた。時間があったので周辺にある多くの碑を見て回ったが立派なものが多く、よく整備されていた。本日の慰霊祭の主碑である「はやて」は、中央に円形の穴が穿かれ、興味を持ったがパンフレットに説明があり納得した。（表紙写真）

慰霊碑「はやて」

式は定刻通り10時30分に開始された。全員【黙祷】の後、祭主の都城市特別攻撃隊戦没者奉賛会会長　池田宜永都城市長が【祭文奏上】された。

その中で「・・・かえり見れば苛烈を極めた戦いの中に多くの国民が尊い命を奪われたことは永久に忘れられない悲しみである。特に都城東・西飛行場から出撃した特別攻撃隊、その支援・誘導に当たられた援護機の勇士達の崇高なる心情を思う時、深い感銘を覚えると共に胸に迫るものがある。又最愛の肉親を失われたご遺族の心情を思う時、誠に痛恨極まりなくお慰めの言葉もありません。戦後我が国は国の再建と発展に努めてきました。・・・本市の輝かしい発展は、英霊諸氏の御加護とご遺族の皆様の御支援・ご協力の賜物であり衷心より感謝の真を捧げます。・・・本日は有水中学校の生徒の皆様も参列しております。戦後生まれが国民の多数を占める様になった現在、数多くの尊い犠牲と今なお変わることのない苦しみ・悲しみを忘れる事なく、悲惨な戦争を二度と繰り返す事のない様平和への誓いを後世に語り継いでいかねばなりません。私達は残された祖国愛・郷土愛を引き継ぎ我が国の平和と発展のための努力を続けていく事をお誓い申し上げます。・・・」と決意を述べられた。

次いで陸士57期生、福岡偕行会相談役菅原道之氏が【追悼の辞】を述べられた。概要は、「・・・昭和16年12月開始された戦争は、当初は破竹の勢いであったがミッドウエイでの惨敗を契機として攻守立場は逆転しアッツ島・ペリリュー島等での玉砕が続くようになり米軍は、沖縄本島に上陸するに至った。反撃する艦艇の乏しい海軍は一機必中の特攻作戦を採るに至り、それに連携し、陸軍に於いても友軍の窮を救うべく敵艦船必殺の航空特攻を開始した。本土各地から、また遠く満州支那戦線からも連日空の勇士が二五〇キロの重い爆弾を抱え不自由な操縦をしながら、更に敵機敵弾を潜り抜けての特攻を繰り広げた。ここ都城に於いても所在していた陸軍第百飛行団から第一

次特別振武隊が編成されて、昭和20年４月６日、丁度72年前の本日　西飛行場から出撃されて沖縄近海の敵艦船に突入された。続いて計10隊合計85名の方々が当時最新鋭機であった疾風（はやて・四式戦）で次々と特攻をされ、その援護部隊からも計45名の尊い戦死者が出た。各特攻隊長は陸軍の伝統通り現役士官である我が陸士57期生が多く20歳前後の前途有為な青年であり、国の為、家族の為に身を挺してその難苦に立ち向かったのである。その行動力と崇高な精神はいつまでも日本人の心に、また世界の心ある人々に深い感動を与え続けるものであります。貴方方の御蔭で、戦後日本の輝かしい復興と平和の72年とがあります。翻って世界の現状を見るに中東では戦乱が続き更に東アジアでも北朝鮮からの言われなき攻勢を受けております。私共はこの苦難を克服せねばなりません。このため必要なものは、これらの底流にある厳として日本を守るという貴方方勇士の特攻精神に通じるものであろうと存じ、感謝申し上げると共に在天の英霊が安んじられる事をお祈り致します。・・・・」と特攻隊長として散った陸士57期の同期生としての気持を述べられた。次いで、茶道裏千家淡交会宮崎支部都城分会の皆さんにより**【献茶の儀】**が実施された。次に、参列者全員による**【献花】**がご遺族、来賓、その他の順に行われた。次いで**【来賓挨拶】**で都城市議会議長荒神　稔氏が「・・・祖国の平和と発展を願い、家族の行く末を案じながら犠牲となられた方々の無念さを思うと誠に哀惜の念に堪えません。戦局の悪化に伴い、連合軍の巨大な戦力に対し航空部隊の若者たちは特攻部隊に志願していったと言われています。この都城に於いても東・西飛行場から多くの若者が特別攻撃隊として出撃しました。残された遺書には、自分の命と引き換えに国を守りぬく決意と両親への感謝と幸せを祈る言葉が切々と綴られています。そこに印された気高い志と切ない思いが目にする者の胸に落ちてくるものであります。この悲惨な戦争を経験した国民の誰もがこの様な悲劇を繰り返してはならないと心に誓いました。そして今を生きる私達にはこの戦争を決して風化させることなく後世に語り継いでいく義務があります。・・・」と述べられた。次いで、（一般社団法人）詩吟朗詠 錦城会　都城支部三名により**【献詠】**を実施。題は「弔特攻勇士　松尾青雨作」を朗々と吟じた。内容も特攻勇士を弔うに相応しく、参列者の心を揺さぶるものであった。次いで宮崎偕行会、陸士57期同期生による**【献歌】**では、アカペラで「陸軍士官学校校歌」、伴奏入りで「同期の桜」を元気よく歌われた。次いで、**【平和へのメッセージ】**を地元有水中学校から参列した学生２１名を代表して中学三年生の花岡誠一郎君が「戦没者慰霊祭で学んだこと・考えたこと」についてしっかりとした口調で、「・・この慰霊祭への参加に際して、戦争の事実を知る事、平和について考える事が大事と思った。戦争について先生に伺った。当時四月一日に米軍が沖縄に上陸しその戦局を変える為、四月六日の今日、特攻機三百機を含む五百機の飛行機が台湾・九州から沖縄に向かって飛び立った。都城からも八機の特攻機が飛び立った。隊員は20歳前後の若者だった。隊員たちはその時、何を考え何を思っていたのでしょうか。家族を守るためでしょうか、その時家族はどんな気持ちだったのでしょうか。私には想像する事すら難しい事です。

修学旅行では沖縄県に行きました。アブチラガマ、ひむかいの塔、ひめゆりの塔、平和祈念資料館、平和祈念公園を訪れま

した。アブチラガマは、大きな洞窟で多くの負傷者が入院していた病院でした。実際に見に行って思う事は実際に戦争があったのだという事でした。

私たちは戦没者慰霊祭に参加する事で戦争について知る事が出来ました。更に平和についても考える機会を得ました。私達が知っている戦争の事を次の世代に伝えていき、平和な世の中を作っていきたいと思いました。最後に戦争によってたった一つの尊い命を奪われてしまった皆様、心より御冥福をお祈り致します。」と述べ参列者に感銘と驚きを与えた。

最後に**【遺族代表挨拶】**で、昭和20年5月25日当地より四式戦で出撃し特攻戦死された熊本県出身、第五十七振武隊 山下孝之伍長（19歳）の弟さんの山下 武氏が兄との別れについて述べられた。

「・・・当時私は小学6年生でした。5月の20日頃、航空隊の兄から「近いうちに故郷の空を飛んでいく。返信無用。」との手紙が母の下に届きました。軍事機密なので無論、、基地や行先などは書かれていませんでした。その日から私は家にあった大きな日の丸の旗を竿に結びいつでも持ち出せる様にし、飛行機が良く通る朝を待ちました。二・三日後爆音が聞こえたので日の丸の旗を持って飛び出し上空を仰ぐと編隊を組んだ飛行機が見えました。傍の堤に駆け上がり力の限り旗を振りました。編隊の中の一機がスーと隊列を離れて大きく旋回しまた元の隊列に戻り、飛び去りました。私は兄の飛行機に違いないとその飛行機が視界から消え去る迄旗を振り続けました。戦死後送り届けられた遺書の中に、「明日24日7時半頃故郷の上空を通り宮崎に向かう」との一節があったので、その光景は、兄との鮮烈な別れとして私の胸に深く伝わりました。子供の頃から兄を知る全ての人が明朗活発、熱血漢として評される兄は、出撃の朝、三角兵舎に差し込む夜明けの光の中で「ただ今元気旺盛、出発時刻を待っております。愈々この世とお別れです。お母さん、必ず立派に体当たり致します。宮崎の都城が私の最後の基地です。昭和20年5月25日8時。これが私の移駐する時刻です。」と記しました。又「色々なものを持って慰問に来て下さる地元の方々の真心に感動し、人情の厚いのに私は思わず涙が出ました。お母さんの様な人でした。私は姿が見えなくなるまで見送りました。」と書き残しています。やがて特攻隊員としての戦死の報が伝えられると兄を讃え、感謝の言葉を告げるために町内の方々が次々に私の家に来られました。母は「お国のために良く頑張りました。」と笑って答えている様でしたが、「親としてこんなに辛い事はない。人前では笑っているが、心の中ではいつも泣いています」と話していたのを密かに聞いた覚えがあります。日本は敗戦後今日まで72年間戦争による犠牲者を出さぬ平和国家として世界有数の繁栄を誇る国家となりましたがその陰には国の礎となるべく尊い命を捧げた英霊達と家族を失った遺族の救い難い悲しみ、そして戦中・戦後の国民の苦悩の歴史があった事を忘れてはならないと思います。私自身、親となり孫を持つ世代となり、家族の無事を願い祖国の未来を信じて南海に逝った兄への哀惜の思いは深まるばかりです。せめて兄の生きた証として、その拠り所となるものを残したいと平成21年兄の命日に兄の記念碑を建てました。・・・戦争は殺戮と破壊と悲しみをもたらすものであり絶対にしてはなりません。平和の尊さ、命の尊さを語り続ける事は、戦争の辛酸を舐めつくした私達の責務と考えます。しかし、美しい日本の国土とそ

こに育まれた文化と歴史そして民族の誇りを守る志は決して忘れてはなりません。・・・・」と遺族の心情について淡々と又言葉に詰まりながらも情を込めて語り参列者に大きな感動を与えた。

二　所見

・　御遺族の心と顕彰会会員の役割について

今回最後に遺族挨拶で、山下氏が兄上との鮮烈なる別れの場面を紹介された。そして最後に「・・しかし、美しい日本の国土とそこに育まれた文化と歴史そして民族の誇りを守る志は決して忘れてはなりません。・」と述べられたのは、特攻隊員達は「正にそのために死んでいったのだ。だから犠牲者でも何でもない」という遺族としては中々言えない事であった。慰霊祭で御遺族からこの様な堂々とした話は中々聞けないが、時代・時間と共に御遺族の考えも変わっていくのかなと感じた。又、72年経ても昨日の事の様に鮮明に覚えておられ聞く者に深い感銘を与えた。他人であれば一事象として残っているだけであろうが、愛する肉親・家族の事となれば深く心に刻まれ一生消えないのは当然であろう。我々が特攻隊員の崇高な行動に思いを致しても、御遺族の慰霊の心には遥かに及ばないのである。

特攻隊戦没者の慰霊祭の参列者では御遺族が主役と言われるが当然である。御遺族の慰霊の主対象は当然乍ら身内に対するものが主であるが、彼らの心を後世に伝えるに御遺族程説得力を有する者はないであろう。一方我々顕彰会会員は、特攻隊の多くの戦没者の慰霊と共にその行動を世の中に広く知らしめ顕彰する役割も担っている。遺族会員以外の我々一般会員は如何にして特攻隊員の精神を後世に伝えたら良いのであろうか？　この問題こそ我々が日頃から考え、悩み続けている事である。「日頃から特攻隊員の遺書・心情について勉強する」、「特攻隊の行動・戦史・戦術について勉強し特攻隊をよく知る」「特攻関係慰霊祭、月例法要等に参列して、多方面の方から色々な話を聞き、自分の意見を述べる」「賛否両論の特攻関係の出版物を読み、特攻生存者の話を聞き真実を把握し、自分の考えを纏める」等々色々な考え方があるが、どの様にして体得した「糧」であってもそれは多くの国民に伝える時の大きな強みとなるものであり、決して間違ってはいないものと思う。今回御遺族のお話を聞いて、思ったのは、精神の伝承は当然ながら心の問題であるので、やはり御遺族の心を我が心とする位でないとだめだと感じた。御遺族の高齢化、減少化の影響は大きい。今後我々の「精神の伝承」についての顕彰活動を引き続き真剣に考えなければならないであろう。今回の慰霊祭で中学生代表が、「・・・私達が知っている戦争の事を次の世代に伝えていき、平和な世の中を作っていきたいと思いました。・・」の言葉に負けない様に我々会員も特攻精神の継承に奮闘努力しようではないか！

旧鹿屋基地特別攻撃隊戦没者追悼式に参列して

事務局長　理事　石井光政

平成29年４月８日、鹿児島県鹿屋市において行われた旧鹿屋基地特別攻撃隊戦没者追悼式に鹿屋市在住の顕彰会会員朝倉素雄氏と共に参列の機会を得たので報告します。

一　実施状況

旧海軍鹿屋基地は現在の海上自衛隊鹿屋基地（鹿児島県鹿屋市）に所在し、昭和11年４月に開設され、当初は陸攻機基地としてマレー作戦時のイギリス海軍の戦艦を撃沈する大戦果を挙げた部隊が配置されていました。本州最南端で沖縄に最も近い海軍航空基地として、大戦末期の20年春からは特攻機発進基地として日々多くの若者が鹿屋から黒潮踊る沖縄へと飛び立ちました。

その数82日間に９０８名。散華された英霊を祭る慰霊塔はその鹿屋基地を見下ろす小塚公園にあります。公園の慰霊塔前で慰霊祭は行われる予定でしたが前日までの激しい降雨と当日の天気予報から会場を「鹿屋市文化会館」に変更し催行されました。

慰霊祭は午前11時、海上自衛隊鹿屋基地儀じょう隊の「捧げ銃」の号令に合わせた黙祷から始まり、市消防隊音楽隊の演奏による国歌斉唱、鹿屋市長の祭文に引き続き、鹿屋市市議会議長、遺族代表、生存者代表及び海上自衛隊第１航空群司令から追悼の言葉が述べられ、その後献花が行われました。

鹿屋基地儀じょう隊

献花には全国各地から参列された53組１３６名のご遺族が菊の花を手向けられ、鹿屋から飛び立たれた方の多さとそれを今もって追悼される方の熱い心情が伝わってきました。

引き続いて旧軍の方による特攻隊員の遺書の朗読と同期の桜の合唱が行われましたが涙を禁じ得ませんでした。

そして最後に今春小学校を卒業し、新中学生となった女子生徒が自ら作文し受賞した「平和へのメッセージ」を朗読、

「平和へのメッセージ」の朗読

再び儀じょう隊による捧げ銃に合わせて拝礼し式典は厳かな雰囲気の中で12時30分終了しました。

二　所見

慰霊祭までの時間を利用して市役所、小塚山公園、野里国民学校跡（特攻隊員の居住地）及び桜花の碑を見学しました。見学には一緒に慰霊祭に参列した朝倉素雄氏が案内してくれましたが、彼は私の幼馴染であるばかりでなく、鹿屋に海軍航空基地を誘致し、戦後は小塚山公園に特攻慰霊碑を建立した第２代鹿屋市長「永田良吉」氏のお孫さんでもあります。お父上も陸軍士官学校を卒業し、大戦中は百式司偵に搭乗、特攻隊に指名されながらも終戦を迎え、戦後は航空自衛隊に奉職された方です。永田市長は鹿屋を包含する大隅地方の開発に私財をすり減らしてまで尽くし、勲二等旭日重光章を受賞、大隅の父として名誉市民となり今も市役所入り口に銅像が有ります。また、海上自衛隊正門前にある鹿屋航空基地史料館のロビーにも永田良吉コーナーが有り、如何に大隅地区と海軍航空に尽くされたかが分かります。

その朝倉氏の案内で短時間でしたが戦跡等を巡り、その後慰霊祭に参加できたことは、ここから飛び立たれた英霊に思いをはせるとともに、先人のご苦労を偲ぶのに良い思い出となりました。

式典は鹿屋市主催でしたので、海上自衛隊の全面的な支援も得られ、済々と行われましたが、世代の交代と共に他の慰霊祭が衰退していく中、国家のために尽くした方々の慰霊顕彰を継続実施するために、慰霊祭を行政が行うことの重要性を痛感しました。

また、宮崎でも、出水でもそうでしたが、若い人たちが慰霊祭に参画することは、先の大戦で我々の先人が如何に苦労したのか、その上で今の我々の生活が有るのだということを繋いでいくためにも重要で、ここにも行政が慰霊祭を行うことの大きな意義が有るものと感じました。

第２代鹿屋市長「永田良吉」氏胸像とお孫さんの朝倉素雄氏

旧鹿屋航空基地特別攻撃隊戦没者慰霊塔

第三十四回宮崎特攻基地慰霊祭に参列して

会員　倉形　寛

平成二十九年四月九日、「宮崎特攻基地慰霊祭」に参列したので所見、所感等を報告する。

当慰霊祭は、宮崎空港滑走路西端の脇（旧海軍宮崎空飛行場敷地内）に位置する「鎮魂碑」前において実施され、今回で三十四回目となる。こぢんまりとした敷地内には「鎮魂」慰霊碑、観音堂、国旗および旭日旗掲揚竿がある。

「鎮魂」慰霊碑

この慰霊碑は、先ず昭和五十七年に宮崎基地生存者、ご遺族、宮崎県内関係三十二団体の協賛により慰霊碑建設期成同盟会が結成され、特攻隊員を含む戦没者（七九九名）、空襲犠牲者（一二三名）、および航空大学校（空港内に所在）殉職者の慰霊と宮崎基地に関わる史実の後世への伝承を祈念して昭和五十八年に建立された。同年除幕式が執り行われた後、翌昭和五十九年三月に第一回目の慰霊祭が行われ、以降毎年開催されている。

今回の慰霊祭は開式の辞により開始され、先ず参列者全員が地元赤江小学校児童のブラス・バンドの伴奏により国歌を斉唱し、国旗と旭日旗が掲揚された。（後、半旗となる。）続いて航空自衛隊新田原基地のラッパ手三名による追悼吹奏「悲しみの譜」で全員黙祷。

次に慰霊祭実行委員会会長・後藤徹夫氏から追悼の辞、宮崎市長・戸敷正氏並びにご遺族代表からそれぞれ慰霊の言葉が述べられた。「毎年彩が美しい花々、ブーゲンビリアが宮崎の青い空に映える頃、慰霊祭を開催してご英霊をお迎えする。しかしながら、宮崎特攻基地に関する史実を想う時、涙が出る。そして改めて戦争の悲惨さ、命の大切さ、平和の有難さを噛みしめる。次の世代に伝えて行くことをお誓い申し上げる。」（後藤徹夫氏：追悼の辞要約）

宮崎市長は「宮崎特攻基地慰霊碑奉賛会が昨年開催された宮崎特攻基地に関わる資料展は五日間で約八千名の来場者があったと聞く。自分も資料展を拝観したが、展示された数々の資料、戦没者の手紙、遺書を見た。資料展は非常に良い内容で感動した。」と述べられた。ご遺族代表の方は遺書の奉読であったが当日は

半旗とされた国旗、軍艦旗

甥に当たる方が都合で参列されることが出来なかったため、奉賛会の方が代読された。

この後、参列者全員による献花が行われた。次の献詠が終わると、地元赤江小学校卒業生代表二名が「特攻基地に学んで」というテーマの作文の朗読を行った。作文の題名は「ありがとう平和、ありがとうふるさと」で、遠足で地元赤江にある慰霊碑の存在を知ったこと、奉賛会の方から宮崎特攻基地に関わる史実について説明を受けたこと、戦没将兵は皆、家族、ふるさと、国を守るために厳しい訓練を受け、命を懸けたことを知って泣いてしまったこと、知覧にも行ったことなどを読み上げた。

閉会の辞で式典は終了したが、その前に赤江小学校ブラス・バンドが「おぼろ月夜」と「ふるさと」の二曲を演奏した。「ふるさと」は参列者全員で斉唱したが、「おぼろ月夜」をご遺族の方が歌われていたのが印象的であった。

今回第三十四回宮崎特攻基地慰霊祭は、参列者は約二三０名、ご遺族は二０名ほど（旧軍の方は大勢いらっしゃらなかった）であり、落ち着いた、厳かな雰囲気で非常に感動した。

所見としては、先ず管理事項がとても充実していたことを強調する。会場付近の数箇所に会場への案内板を掲示し、また要所要所に案内要員も配置されていた。受付には席への引率案内担当者が常に数名待機しており、参列者が戸惑うことが無いようによく配慮されていた。会場運営にあたる係りの人たちも皆動きがよく、整斉としていた。また、総指揮者と思われる方が会場の一番深いところに入り口方向を向いて立たれ、開式まで動かないで全般の状況を点検・掌握されていた。

来賓として、宮崎空港に乗入れている航空各社の幹部の方々、航空自衛隊新田原基地司令、自衛隊宮崎地方協力本部長、赤江小学校長が来られていた。

赤江小学校では、児童が高学年になると「地域に感謝する会」に参加し、郷土について調査したり、ボランティア活動をしたりしているそうである。その結果として宮崎特攻基地関連の演劇も行っていると聞く。以前、都城の慰霊祭に参列したが、都城では中学生が戦没者に対して誓いの言葉を述べていた。日本の未来を担う若い世代にも、このような子供たちがいるのを実際この目で見て、とても頼もしく思うと共に同じ日本人として誇りに思う。

また、航空自衛隊新田原基地からラッパ手三名が甲武装で「悲しみの譜」を吹奏したが、式典が非常に厳粛な雰囲気になったと思う。

宮崎基地は、昭和十八年十二月に陸攻練習航空隊として宮崎空が開設された、海軍赤江飛行場である。この地から出撃したのはそのほとんどが中攻の銀河である。また特記事項として、陸軍の飛行第七、および九八戦隊が海軍第五航空艦隊の指揮下に編入され、特に第七戦隊は宮崎基地から出撃、主として沖縄水域の米水上艦艇を目標に攻撃（雷撃）した。陸軍機の海軍指揮下での運用は、雷撃機が欲しい陸軍と南方や中部太平洋方面において陸攻を大量に損耗してしまった海軍の思惑が一致し、協議の結果として採られた措置である。なお、両戦隊の装備した高性能機・四式重爆「飛龍」（雷撃型に改造）は、海軍では「靖国」と呼称さ

れた。

昭和二十年三月十八日から二十一日までの「銀河」神風特別攻撃隊菊水部隊銀河隊、三月二十七日の第一銀河隊から五月二十五日の第十銀河隊までが宮崎基地から出撃し、沖縄方面の敵艦船に対して攻撃が続けられた。

ここで、宮崎基地から出撃した第十銀河隊の長谷川薫中尉と、米駆逐艦キャラハン（DD７９２）の数奇で皮肉な運命について述べる。

その前に、この文章をお読みの方は米戦艦ミズーリに体当り命中した特攻機の搭乗員・第五建武隊石野節雄二飛曹のご遺体を、乗組員多くの反対意見を退け、米海軍条例に基づき軍礼をもって水葬を執り行った艦長ウィリアム・J・キャラハン大佐のエピソードをご存知のことと思う。（追記：平成十三年四月十二日、戦艦ミズーリ記念艦上において、米側の提案・主催により故石野二飛曹のご遺族、ミズーリ生存者を招き石野二飛曹の慰霊祭が執り行われた。）

キャラハン大佐の実兄は、第三次ソロモン海戦（昭和十七年）で戦死したダニエル・J・キャラハン提督（海軍少将）である。キャラハン提督は任務部隊指揮官であり、重巡サンフランシスコを旗艦として座乗、戦闘中戦艦霧島の主砲射撃による艦橋への命中弾で、カッシン・ヤング艦長をはじめ幕僚全員とともに戦死した。

米駆逐艦キャラハンは、１９４３年十一月戦死したキャラハン提督に因んで名付けられ、キャラハン夫人立会いの下、進水した。なお、同時期、カッシン・ヤング艦長に因んで駆逐艦カッシン・ヤングも進水している。この事実を暫くの間、覚えておいて頂きたい。

以下は、バリー・J・フォスター氏（父親は駆逐艦キャラハンの乗組員（艦艇電気員）であった。）による、“The Destroyer：The Story of the USS Callaghan”の一部を翻訳し、分かりやすく要約した拙文である。なお、この書籍の参考文献の一つに「特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会、東京“Tokubetsu Kougekitai（Special Attack Corps）１９９０”が掲げられているので紹介しておく。

駆逐艦キャラハンの戦歴概略：

１９４５年１月21日、台湾沿岸で空母タイコンデロガを攻撃してきた特攻機２機を撃墜。

１９４５年３月27日、３機の99式艦爆の攻撃を受けたが全機撃墜。

１９４５年３月31日、１機の彗星の攻撃を受けたが撃墜。

１９４５年４月１日、２機の特攻機を撃墜。

＊ここで、１９４５年５月25日、宮崎基地から出撃した第十銀河隊小隊長の長谷川薫中尉（戦艦ウェスト・バージニアを攻撃、突入寸前で撃墜される。）の記述がある。

１９４５年５月25日、雲の切れ間から突如として２機の双発機が現れ、攻撃してきた。先頭の１機は艦からわずか30ヤード程のところに撃墜した。２機目は煙を引きながら飛び去って行った。撃墜した１機目のまだ浮いている機体の残骸の上に、二人の搭乗員が這い出て来るのを発見した。チャールズ・M・ベスホルフ艦

長もこれを視認した。そしてまだ戦闘中であるにも拘らず、キャラハンを停止させ、直ちに救助隊を送って日本の搭乗員２人を救い上げた。

パイロットはキャラハンの甲板で戦死、もう１人の航法士はまだ意識があったため、もっと充実した医療設備のある戦艦ニュー・メキシコに移送し、治療に当たらせた。この航法士は、カオル・ハセガワである。彼は一命をとり止め、捕虜となった。甲板で出血多量で戦死した吉田湊飛曹長は、ベスホルト艦長の指示により軍礼をもってキャンバスで包まれ、水葬された。

長谷川薫中尉は戦後、段ボール会社・レンゴー株式会社の名誉会長となった。１９９５年と１９９９年に駆逐艦キャラハンの生存者会に参列し、キャラハンの生存者たちに、戦闘中に彼の生命を救ってくれた崇高な行為に対し、感謝の意を伝えた。

駆逐艦キャラハンはその後、沖縄水域において１９４５年７月９日からレーダー・ピケット艦となり、レーダーによる遠距離哨戒任務に従事した。

１９４５年７月28日、レーダー・ピケット任務の最後の夜、翌日は任務を終えて米本土に帰還するという、まさに最後の夜の深夜（７月29日00：30）、突如旧式木製複葉機５機が出現した。猛烈な対空砲火を海面すれすれの超低空でかいくぐり、１機がキャラハンの右舷喫水線付近の機関室に命中し、その爆弾は艦内で爆発した。乗組員は機関室の消火、防水、復旧に全力で当たったが、火災は対空砲の弾薬庫に引火、爆発を起こして０２３５時、47名の乗組員と共に沈没した。

ベスホルフ艦長を含む生存者は重油の浮く海面から他の駆逐艦とＬＣＳ（上陸支援艦艇）に救助された。

この救助に当たった駆逐艦こそが、「カッシン・ヤング」だったのである！何という偶然であろうか！駆逐艦キャラハンは第２次大戦で特攻機により沈没した最後の艦艇となったのである！

以上、フォスター氏の記述であるが、足りない部分は米海軍の公式記録で駆逐艦キャラハンに関わる記録を翻訳、引用・補足したのでかなり精度は高いものになったと思う。

さて、キャラハンを攻撃したのは沖縄・宮古島より出撃した神風第三龍虎隊の五機であった。第三龍虎隊は、九三式中練「赤とんぼ」で編成されていた。機体のほとんどが木と布であるため、レーダーにも反応し難く、また３インチ以上の砲弾に装備された近接（ＶＴ）信管も作動しない。これらの機体特性と夜間海面すれすれの超低空飛行による攻撃であったため、成功した可能性が極めて高いと言えよう。

今回、宮崎特攻基地慰霊祭に参列したことで、たまたま第十銀河隊の長谷川中尉と米駆逐艦キャラハンについてご紹介する機会を持てたことはとても良かったと思っている。

キャラハンについて記述するため、今回フォスター氏の記事を一部引用したが、氏が日本側資料（当顕彰会の前身である協会の出版した書籍）をも参考として使用されている様に、我々も「特別攻撃隊を正しく知り、正しく理解し、正しく後世に伝え継いでいく」ためには、今後米側の資料も使用して調査研究をしていく

必要がある。いや、必要不可欠であると敢えて断言する。

米駆逐艦は、広大な太平洋では強力な日本艦隊、そして恐怖の特攻機と、大西洋においては独海軍のUボートの脅威と、まさに死闘を繰り広げ、実に勇敢に戦い、正しく「比類なき勇気」を示した。筆者は四十年以上前から米駆逐艦に興味を抱き、米側の資料や書籍を保有しているが、太平洋における特攻機との激闘については日本側でなかなか書籍化されていないのが実に残念である。

筆者の保有する資料の中に、米駆逐艦ラフェイの記録がある。１９４５年４月16日にラフェイは沖縄水域で実に二十機以上の特攻機の攻撃を受け、艦（２０００トン）の九箇所に体当り命中、爆弾は４発命中という沈没必至の大損害を受けたが乗組員の活躍により遂に沈まなかった。翻訳に時間が掛かるが、是非ご紹介いたしたい。この駆逐艦ラフェイの他にも比島、沖縄で米艦艇が特攻機とどのような闘いをしたのかが理解できる資料もあるので追々ご紹介していく考えである。

式典会場において、予備自衛官である筆者は制服で参列していたためか、宮崎市長戸敷正氏、宮崎県遺族連合会会長藤安澄夫氏から「今後もよろしくお願いします」とのご丁寧なご挨拶を頂いた。

今回宮崎特攻基地慰霊祭を運営された実行委員会の方々、慰霊碑奉賛会の方々、赤江小学校の方々、宮崎市長閣下他、関係職員の方々、航空自衛隊新田原基地の方々に心から深く敬意をあらわすとともに、この機会を与えてくださった本顕彰会に感謝を申し上げる。

なお、特にご紹介いたしたい事項が一件ある。慰霊祭に先立って、新垣評議員から一冊の書籍を頂戴した。この書籍は今回の慰霊祭に参列するに当たり、大変役に立った。新垣評議員に厚く御礼申し上げる。

モスグリーンの青春　安田郁子女史著
鉱脈社刊　１，４００円

安田女史は大正十四年生まれ、地元宮崎のご出身で高等女学校時代を相前後する多感な時期を宮崎基地との関わりや、陸海軍人、特攻隊員との交流等で過ごされ、宮崎特攻「鎮魂」慰霊碑の建立にも関わられた方である。地元に軍の基地があった、当時の日本人の戦前、戦中、戦後の物の見方、考え方の推移や生活などが分かる一級資料とも言える大変貴重な本である。

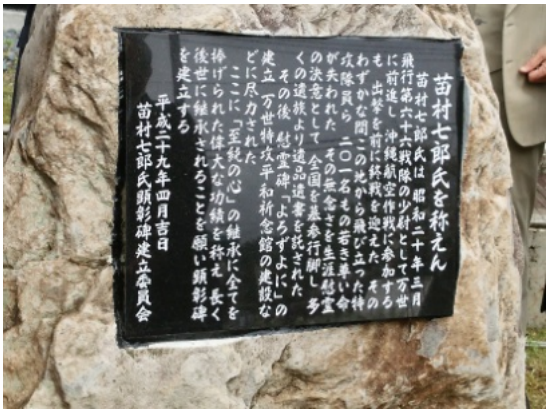
第46回万世特攻慰霊碑慰霊祭に参列して

理事　羽渕徹也

一　万世特攻慰霊碑慰霊祭

平成29年４月９日（日）、鹿児島県南さつま市加世田において斉行された「万世特攻碑慰霊祭」に当顕彰会を代表して参列させていただきました。

この慰霊祭は毎年４月第２日曜日の午前10時半から行われており、鹿児島中央駅から主催者が用意する無料送迎バスが午前８時45分出発であるため、前日には鹿児島市内で宿泊する必要があり私は前日の土曜日に鹿児島に入った。しかし、鹿児島県でも４月初旬に桜の開花宣言が出されていたが、生憎の雨で桜の満開には程遠く開花を待ちかねているような雨模様であり、明日の慰霊祭がどうなるものか心配していた。しかし、驚くことに当日は雨も上がり暑くも寒くもない慰霊祭に最適な天気となった。これも英霊の御蔭だと感謝し奉賛会が用意したバスに乗車した。この送迎バスには二十数名の方が乗車されていたが、私自身の知っている方にはバスの中でお会いしなかった。山道を走ること約１時間かかって慰霊祭の会場に到着した。この「万世特攻平和祈念館」前面の広場に設置されている慰霊祭会場では昨夜の大雨対処としてテントに残っている雨水除去、椅子の並び替え等の作業に南さつま市の若い職員二十数名の方々が取り掛かっていた。少々時間があったので、私として初めてである「万世特攻平和祈念館」の中や会場周辺を見学させてもらった。会場の参道等には、知覧特攻会館程多くはないがご遺族、戦友同期生、賛同された篤志家などによる多くの灯篭が設置されており、その周辺は南さつま市により公園は見事に整備されていた。



H29.4.8の昨日に新設された苗村七郎碑

特に、会館の玄関入口に向かって左側には、昨日・四月八日の大雨の中で関係者により建立式が行われこの碑が建立されたとお聞きした「苗村七郎氏の碑」（万世特攻平和祈念館等の建設に生涯尽力され、五年前に九十一歳で死亡）が新しく建立され会館の中の写真、説明文と共にこの会館設立に関する経緯が語られているが、ここ万世特攻基地・故苗村七郎氏などについては所見で後述する。

祈念会館内の故苗村七郎氏の解説

第四十六回となる万世特攻慰霊碑慰霊祭は朝十時半から万世特攻慰霊碑奉賛会副会長の室屋正和氏（南さつま市議会議員）による開会の辞から開始された。毎年は開式の時間に合わせて海上自衛隊

鹿屋基地からのＰ３Ｃによる慰霊飛行が実施されるのだが、昨日の荒天のため本年は中止となったのが残念ではあった。国旗掲揚、黙とうに続いて奉賛会会長である川野信男氏による追悼のことばに続いて遺族代表として宮城県から参列された毛利　理命（大阪府天王寺師範学校出身で第66振武隊の一員として出撃され昭和二十年五月に散華されている。）の甥である毛利良一氏から慰霊の言葉が述べられた。

慰霊祭における多くの供花

建立式があったため大阪から苗村氏の関係者９名も加えて約二百六十名もの参列者であったが、以前は四、五百名と多かったが最近はやはり寂しくなっていると関係者からお聞きした。その中でも遺族は少なくなったというものの九州各地や関西、宮城からも年代を超えて甥姪にあたる五十名程の参列者があったが、万世基地の旧隊員はやはり十名少々と淋しくなっている。

万世特攻平和祈念館の正面

今年の慰霊祭は前日の「苗村七郎氏の碑」来賓としては、やはり九州の地でもあり、国会議員も尾辻秀久氏（本人）、野間健氏（代理）、宮地拓馬氏（代理）の３名に加え、南さつま市市議会議員、南九州市長、海上自衛隊鹿屋航空隊主席幕僚、自衛隊鹿児島地方協力本部、陸上自衛隊国分駐屯地、知覧特攻慰霊顕彰会、太刀洗平和祈念館、福岡県偕行会、鹿児島県偕行会等の関係者が多く参列されていた。私も（公財）特攻隊戦没者慰霊顕彰会の理事長代理で来賓として参列しました。

万世特攻平和祈念会館の運営は南さつま市で実施されており、この慰霊祭の開催は形式的には「万世特攻慰霊碑奉賛会」で実施されているが、実質的には受付等の運営、慰霊祭の会場準備等も南さつま市の職員の全面的協力、支援を得て実施されているようであり将来的にも未来永劫継続される事を期待している。

二　万世特攻基地の生い立ち

この「万世特攻基地」は陸軍知覧特攻基地の北西二十キロ、海軍出水特攻基地の南約数十キロに位置しているのであるが、「幻の特攻基地」と言われている。

真珠湾攻撃の翌年である昭和十七年に当時の万世町町長であった吉峰喜八郎氏（前万世特攻慰霊碑奉賛会会長・吉峰良二氏の御尊父）の私邸に陸軍将校三人と

共に万世小学校出身でその頃初当選していた民政党代議士・小泉純也（元防衛庁長官を歴任、元総理大臣・小泉純一郎氏の御尊父）が訪問していた。

訪問の内容は特攻基地建設に関してであった。陸軍が強引に建設したと思われがちであるが、当時南九州財界のリーダー的存在であった吉峰氏は「今後は海運に代わって飛行機の時代が来る。吹上浜の荒れた丘陵地に飛行場を作れば、戦後その跡地を民間飛行場に使えば、国内外への物資輸送の拠点となるだろう。」と日本勝利のうち戦争が終結し民間飛行場となる夢を描いていたのである。

吉峰氏の陳情に基づき、陸軍の飛行場建設が決定した万世飛行場は太刀洗陸軍飛行場の分校として昭和十八年初旬から建設が開始された。松林を伐採し、もともと柔らかい砂地の上への滑走路の急造という事でもあり、多くの勤労動員や過酷な重労働に加え米軍機の空襲と伝染病発症などもあり数々の犠牲者を伴ったこの万世航空飛行場がほぼ完成したのは昭和十九年八月であった。

昭和二十年二月には知覧基地にあった備蓄航空燃料の半分が万世飛行場に移され、沖縄特攻の前進基地として使用されることになったのである。

万世飛行場への第一陣となる飛行第六六戦隊十八機が到着したのは三月であったが、柔らかい急造のデコボコ滑走路のため弱い足の航空機の離発着は困難であったため、主力の航空機は固定脚の九九式襲撃機と軽い一式戦隼などであった。

四月から万世特攻基地を発進し沖縄作戦に向かった飛行六六戦隊、五五戦隊の操縦手などが、終戦までの僅か四ケ月の間に２０一名（振武隊１２１名、第六六戦隊72名、第五五戦隊６名、その他２名―戦後、苗村七郎氏等による資料収集）が散華されている。

三　万世特攻平和祈念館の建立

この万世特攻平和祈念館、万世特攻慰霊碑「よろずよに」の建立などに主に人生を掛けられたのが故苗村七郎氏である事に間違いはない。

苗村七郎さんは、昭和十八年関西大学を卒業後、特操一期生として仙台陸軍飛行学校に入校され、昭和二十年三月飛行六六戦隊の少尉として万世飛行場に転戦し沖縄航空作戦に従軍された後、太刀洗飛行場で本土決戦を待っていたが八月十五日終戦の日を迎える。特操一期生の同期生であり万世飛行場で一緒だった同じ飛行六六戦隊の今田義基少尉、込茶章（たかし）少尉は沖縄特攻作戦において散華されている。

終戦後は、大阪において家業である繊維産業を継いでいたが、この家業を見限り「民芸閣」という飲食業を開店しイロハから学び徐々に事業を大きくしていた。

その頃に菊池寛賞を受賞した高木俊明の「特攻基地知覧」などで、「特攻は事実上の強制であり、特攻隊員は日本の平和を願いながら出撃したというのは作り話である。」といった意見とは異なった立場から、反動的、反軍的な歴史が残ること、これらの資料にされることを嫌い、自分たちが実際に特攻を志願した体験をもとに書き残し、これを訴えていくため遺品や資料をもっと集めようと考えていた。

戦時中と一九六〇年の二度鹿児島の万世を訪れた時に、慰霊碑建立と万世特攻基地が歴史に埋もれてしまうことないよう決意していた。

終戦から二十五年経過した一九六〇年は大阪万博が開催されお祭りムードに湧

いていた時である。三度目の万世基地への訪問となった苗村氏は奥様と共に加世田市（現南さつま市）の市役所を訪れ、約束もなく市長への面会を求め慰霊碑建立話を持ち込んだのである。市役所でさえ存在を知らないと思われる万世基地を歴史に埋もれさせてはならないし、役所の力が必要と考え出撃の模様などを説明した。また、当時では大金である三十万円を慰霊碑建設資金にと差し出したのである。この事は地元の鹿児島新報の大見出しで伝えられた。

これらのことにより、その後地元の協力者が次々と現れ募金活動も活発となり、苗村氏が目指した「よろずよに（万世に）語り継がん」という文字だけの碑文を刻んだ高さ４・５ｍの慰霊碑が一九七二年五月に建立された。更に、遺書などの資料や多くの寄付金が集められ、現・南さつま市の大いなる協力により二十年後の一九九三年に苗村氏が心血を注いだ「万世特攻平和祈念館」が完成したのである。苗村氏が慰霊碑建立を決意してから三十三年経過していた。

平成29年度第63回知覧特攻基地戦没者慰霊祭に参列して

評議員　原島淳子

平成29年5月3日（祭）鹿児島県南九州市知覧町にある、知覧特攻平和観音堂前に於いて斎行された、知覧特攻慰霊顕彰会（会長・南九州市市長塗木弘幸氏）主催の「第63回知覧特攻基地戦没者慰霊祭」に、当顕彰会を代表し、倉形会員とともに参列させていただきました。

知覧特攻平和観音堂

慰霊祭典は、知覧特攻平和観音堂前に於いて、海上自衛隊鹿屋第一航空群第一航空隊Ｐ－３Ｃによる慰霊飛行の後、式典開始のアナウンスにより、式次第に沿い粛々と進められました。

僧侶出仕の後開式の言葉、日本礼道小笠原流鹿児島支部の方による献茶と続き、一同礼の後の黙祷、僧侶による読経の流れる中、知覧特攻慰霊顕彰会会長を始めに、御遺族・来賓・お仲間・各会の代表の方々の焼香となりました。　本日のご遺族の参加は、57柱２０７名との事でした。焼香後僧侶退場の後の顕彰会会長の追悼の言葉では、「年々参列者は減少してきているけれども、特攻戦没者の崇高な精神は継承し、史実を正しく後世に伝え続ける役割をしていきたい」と述べられました。

続く慰霊の言葉での遺族代表は、第１０８振武部隊(第７降魔隊)として、昭和20年４月16日に17歳で出撃をした、井花敏男少尉の弟、井花昭文さんの「17歳で強い決意をもって散って征った兄を想うと胸が熱くなる。１０３６柱の皆様が安らかでありますよう」にと言うことばでした。そのほか少飛会代表・特操会代表

と挨拶は続きました。この3者代表の時だけ、曇っていた空がにわかに晴れ、陽がさしてきたのです。とても不思議な現象でした。

　続いて、詩吟朗詠錦城会による献詠・慰霊電報披露・参加者全員による献花・陸上自衛隊国分駐屯地第12普通科連隊音楽隊による献奏「海ゆかば」・南九州市長あいさつの後、参列者全員による「加藤隼戦闘隊」・「同期の桜」の慰霊合唱と続き、閉式の言葉の後一同礼で2時間に及ぶ慰霊式典が終了いたしました。

　3日の慰霊祭に先立ち、2日に現地入りをした私達を迎えてくれたのは、久し振りに噴火をしたという桜島と降灰と硫黄の香りでした。何も知らなかったのですが、2日未明に桜島が噴火をしていたのです。風の向きにより降灰の場所も変わるとの事で、翌日に控えた慰霊祭はどうなるのかと一抹の不安を覚えたものでした。しかも、当日3日未明には激しい雨。昨年に続き悪天候での決行になるのかと・・・。

　明け方からの天候は曇り時々雨。荒れた天候にはならぬ様にと祈りながら送迎バス乗り場へ。時間前より待っていたであろう方々に混じり乗車。定刻にバスは発車し一路会場へ。　到着後は、受付会場となっている知覧体育館で受付をし、提供されたおにぎりのパックとお茶をいただき、式典会場の下見後知覧特攻平和会館へ。会館内は、ゴールデンウイークと言う事もあり、式典参列以外の一般の見学の方々であふれていました。沢山の方々に特攻とは・特攻隊員とはを知っていただける事は良い事だと思いつつ、私も改めて見学させていただきました。見学者の中には小学生も多々見られ、きちんと遺書を読んだり、隊員の方を調べたりしておりました。その姿に、今で言えば高校生で飛んで征った方々の面影を感じ、目頭が熱くなりました。　熱い想いを抱きつつ会館見学後、再び体育館にもどり先程のおにぎりをいただき、慰霊祭会場となっている知覧特攻平和観音堂前へ。会場内には献花が沢山置かれていました。

　開式前に雨がぱらつき、強い風も吹きだし、やはり悪天候になってしまうのかと、隣席におられた特操会代表の國武統士氏と話をしておりました。この國武氏は特操3期の方で、特操の特攻率が一番多いと話してくれました。来年もお元気な姿で参列してほしいと思います。

　この知覧の慰霊祭の様な、大きな慰霊祭でも、年々参列者が減少しているとの事です。寂しい事ですが、お仲間・ご遺族の方々が少なくなってきているからでしょう。これからは新しい人達の参列を考えていかなければならない時なのかもしれません。知覧の慰霊祭に参列し、「笑って往きます。」そう言い残して飛んで征ったその想いを、後世に伝え続けていかなければならないと、強く強く改めて思いました。

最後に次の歌を捧げます。

征く君に　何をか言わん薩摩富士
　　想いとどけと　願いしか

平成二十九年度第五回「福岡県特攻勇士慰霊顕彰祭」に参列して

理事　水町　博勝

平成二十九年五月十三日(土)十一時から福岡県護国神社の境内にある特攻勇士之像の隣りの参集殿において、福岡県特攻勇士慰霊顕彰会主催による「第五回福岡県特攻勇士慰霊顕彰祭」が斎行され、当顕彰会を代表して参加させて戴いたので、その概要及び所見を次の通り報告します。

一、霊祭の状況

昨年の慰霊祭に出席された故飯田氏の参列記事によると五月四日に行われていました。今年は次週の十三日になりました。小生は以前春日基地に務めたこともあり、五月三日～四日は大型連休中の国内最大級の祭り「博多どんたく」四日は締めくくりの総踊り日、東京からこの時期、交通・宿泊の予約をとることを考えると難儀と思っていましたが、今年は開催日の変更でその不安は解消しました。

しかし毎年福岡県護国神社では春季慰霊大祭は三・四日に執り行われ、四日は当日祭、広い本殿の前の広場はイベント広場で厳粛な中にも賑やかな祭りに合わせ、福岡県特攻勇士慰霊祭は四回行われていました。どんたく祭りの下で欠席された方も今回は参加できたのかなと思われますが、どんたく祭りのエネルギーを貰えなく残念な思いも残ります。

本殿前の広場

祭主は塚田会長に菅原前会長は名誉会長に交替されました。前会長には知覧・靖国・世田谷山観音寺でお会いする度に、同期陸士五十七期は特攻隊の隊長として多くが出撃していった。陸軍特攻中心の同期への思いを常に語られていた。福岡県に特攻勇士之像を建立し、慰霊顕彰祭を軌道に乗せられた。今年は祭場の場所が特攻勇士之像の前から、すぐ近くの参集殿内になりました。特攻勇士之像にまずお参りし、参集殿の祭場では、講堂の壇上に祭壇が祭られています。

福岡県特攻勇士之像

○　祭りの概要と参集者

お祀りされている特攻戦没者の陸軍は百十名、海軍は一九一名、計三〇一名、その霊璽簿は特攻勇士の像の台座に記されている。正面左の副碑には「私たちは決して忘れまい。・・・・自分の命を代

えても護るものが存在することを」裏面には「海行かば」を記す。

祭りは、祭典の部と式典の部の二部に分かれた。

祭壇

○　祭典の部

前段は壇上の神殿の下で国歌斉唱、黙祷、神事（降神之儀・祝詞奏上等）、祭主=会長の慰霊のことば、

玉串奉奠壇上

福岡県護国神社　田村豊彦宮

祭主　塚田征二会長

遺族代表　松井宏喜氏

特攻勇士慰霊顕彰会　原道行名誉会長

自衛隊代表　四師団副師団長片岡将補

春日基地司令小笠原将補

福岡地方本部長藤田一佐

玉串奉奠壇下

衆議院議員　鬼木　誠

衆議院議員　原田義昭

参議院議員　大家敏志

県議代表　加地邦雄

市議代表　川口浩

福岡偕行会　小野正明

福岡水交会　津田慶一

九州つばさ会　御木信宏

福岡県郷友連盟　吉田邦雄

日本会議福岡　山本泰蔵

参列者全員、昇神之儀により祭典部は終了した。

○　式典の部

電報披露

福岡県特攻勇士遺書（山本卓美少佐）の奉読（後記）

奉唱　「海行かば」

奉納舞　藤間流（同期の桜）

博多券番（博多節／黒田節他）

が演じられた。

藤間流（同期の桜）

博多券番（博多節／黒田節他）

二所見

参列者は各界及び戦友会から多くの方がカクシャクとして参加され、以前の碑前天幕設営の状況下よりも多くの方が出席されたように思われ、参集殿も満席の様子であった。祭場は演舞場の様相で、場に相応しい奉納舞が演じられ、博多文化の舞は他の慰霊祭では決して拝見できないもので、地元では往時も特攻勇士の前で演じられたのか彷彿され、故郷の文化は御霊の霊も参集者と共に癒されたと思った。

又神社の社務所には本福岡県特攻勇士慰霊顕彰祭のパンフレットがご自由にと置いてあった。「各地の慰霊祭で初めて目にするもの」

パンフレット

今までは戦友・ご遺族と関係者によって慰霊顕彰がすすめられたが、これからは興味・関心・勉強してみようとする若い世代に目を向けて、祭りを継承していこうとする慰霊顕彰会の努力が伺えた。（後日この努力の結果がを会の方に伺いたい。）

慰霊祭でも詠じられ、このパンフレットにも次の遺書が書かれていた。

遺書

陸軍少佐　山本卓美命
昭和十九年十二月七日
比島レイテ島付近にて戦死
福岡県糸島郡前原町出身
二十一歳
父上様
母上様
卓美ハオ先ニ失礼イタシマス。
二十有余年ノ間、此ノ上ナク可愛ガッテ頂キマシタ。
山ヨリモ高ク、倦みリモ深キ養育ノ御恩ニ何等報ユル所ナク、御心配ヲカケ通シテ参リマシタガ、今ヤ御恩ノ万一ニ報ユル時ガ参リマシタ。
光栄アル八紘隊長ニ選バレ、南海ニ水清く屍トナルハ男子ノ本懐、只々感謝感激ノほかリマセン
信ズルハ　皇国ノ必勝
祈ルハ　皇運ノ無窮
靖国神社デ、オ待チ致シテ居リマス。
御両親様、幸福ニ御暮シ下サイマス様、心ヨリ祈リ上ゲマス。
昭和十九年十一月三十日

山本卓美日記には母上へ

原町出発以降の状況をお知らせしたいと思い、暫く止めていた日誌を書きます、筆不精故、怠ることがあるかも知れませんが、死後、何も知る手段が無いかも知れないと思って努めて書く積りです遺書と思って読んでください。

日記を見ると、遺書を書いた十一月三十日は、台北に到着し飛行師団司令部において参謀から、比島方面の情報、艦船に関する資料の講義を受け決意を新たにした時であった。比島では書けないだろうと遺書を残した。　完

第51回特攻殉国の碑慰霊祭に参列して

評議員　鮒田　英一
会　員　金子　敬志

平成29年5月13日（日）長崎県東彼杵郡川棚町にある「特攻殉国の碑」前において催行された「第51回特攻殉国の碑慰霊祭」に当顕彰会を参列したので概要・所見を報告する。

特攻殉国の碑

一　慰霊祭の概要

当日は雲一つ無い晴天で日差しが強かったが、海岸沿いにある式場には心地よい海風が吹き抜け、大変に気持ち良い天候であった。

定刻の5分前に「軍艦旗上げ方5分前」の放送が流され、参列者は起立し軍艦旗掲揚を待った。

時間になり「上げ」の号令により、軍艦旗が掲揚され、参列者は軍艦旗に敬礼をして慰霊祭が開始された。

「国歌斉唱」「黙祷」に続き、2名の方が「慰霊の辞」を捧げられた。

まず初めに祭主の新谷郷総代　廣川英雄氏が慰霊の辞を捧げた。（後掲）

続いて、第9震洋隊隊員としてフィリピン方面で散華された真田頼（たよる）様のご子息、真田立穂氏が遺族代表として慰霊の辞を捧げられた。

「慰霊電報・書翰奉呈」の後、「拝礼」が行われた。

遺族、来賓、元隊員に続き、全参列者が主催者が用意した菊の花を手にして「特攻殉国の碑」の前に進み、全戦没者に哀悼の意を込めて献花をした。

拝礼（献花）

この後、海上自衛隊佐世保音楽隊による奉納演奏が行われ、男子隊員の独唱による「千の風になって」美空ひばりさんの「愛燦燦」最後は海上自衛隊らしく「行進曲軍艦（軍艦マーチ）」が演奏された。

慰霊祭も終盤に近づき、参加者全員による「同期の桜合唱」が行われた後、廣川英雄氏が「閉式の辞とお礼」を述べられて慰霊祭は終了となった。

（金子　敬志記）

二　所見

一般的に年月の経過とともに当事者・関係者が減少すると慰霊祭の維持継続は困難になる傾向があるにもかかわらず、本慰霊祭は、地元の行事として定着し、老若男女を問わず多くの住民の方々が式典運営に協力して厳粛のうちにも和気藹々とした雰囲気のもとに実施されており、このことに強い感銘を覚えた。

本慰霊祭は平成25年から、「特攻殉国の碑保存会」から川棚町新谷郷に継承された。保存会は、長年に亘り慰霊碑の保存と慰霊祭の執行の任に当たっていたが、保存会発足当初より地元の絶大な支援と協力のもとにこれらの活動は行われてきた。そしてその背景には、戦時中の海軍と地元との良好な関係や、戦後における関係者のたゆまない努力があった。そのため実施の主体が保存会から新谷郷に移っても、慰霊碑は整然と整備され、慰霊祭も軍艦旗掲揚に始まる一連の海軍様式と地元独自の工夫が融合し、整斉と斎行されている。

町の公式ＷＥＢサイトによれば平成29年３月時点で、川棚町は世帯数約５，６００、人口１４，２００人であり、そのうち新谷郷は世帯数約３６０、人口約９８０人に過ぎない。この決して大きいとはいえない地区の住民の方々が中核となり、常日頃から特攻殉国碑の保存整備や年次慰霊祭を続けておられる姿には頭が下がる思いである。

式典終了後、総代の廣川氏から伺ったお話によれば、特攻殉国の碑には地元の小中学生が先生引率の下、歴史社会教育の一環として訪れており、また廣川氏自身も求めに応じ近隣の小学校に赴いて講話をされている由であり、将来の日本を担う若者たちが特攻の歴史や平和の尊さをしっかりと理解していく上でまたとない機会となっている。

今後、戦時中の特攻部隊を知る関係者の数は減少せざるを得ないが、新谷郷のように地域に根付いた支援・協力・教育が続く限り、慰霊の営みは末永く続いていくであろうと思われた。

（鮒田　英一記）

新谷郷総代　廣川英雄氏

慰霊の辞

本日、ここに、第五十一回特攻殉国の碑、慰霊祭を執り行うに当たり、新谷郷を代表して慰霊の辞を述べさせていただきます。

顧みますと、全国の戦友、ご遺族並びに勇士の方々の暖かい友情と熱意によって立派な特攻殉国の碑が、ここ新谷郷に建立されて、第五十一回の慰霊祭を迎えました。又、平成十三年の第三十五回からは、新谷郷主催として、はやいもので十六回を迎える事ができました。この間、毎年の例祭は申すに及ばず平日も日本全国から心ある人々の参拝や供花供香も絶えないことは、新谷郷民として誠にありがたく感謝しているところです。

ここに眠る三千五百十一名の英霊もさぞかし満足の事と存じます。

本日は、全国から、ご遺族の方々をはじめ、戦友、ご来賓の方々も、町内は勿論県内・県外から遠路多数の御臨席を賜り厳粛の中この様に盛大に慰霊祭を執り行うことが出来ますことに厚く御礼申し上げます。

戦後七十二年の歳月は、ややもすれば、当時の全てが風化されようとしている今日、国の安泰と平和を願い、家族の幸せを願い、戦場に散華された、御英霊の威徳を偲ぶとき、二度と再び、この様な悲劇を繰り返してはならず、あらためて、御英霊の尊い犠牲と、ご遺族の方々の深い悲しみを超えて、もたらされた、今日の日本の平和と繁栄があることを、次の世代に、お伝えしていく事が私たちの責務だと思っています。

今年も多くの青少年が、慰霊碑を訪れて平和について考えてくれます。また、川棚、小串両小学校の皆さんが「特攻殉国の碑・資料館」を学びの場として今日の平和があることを学んでくれました。

私たちは、命の重さ、平和の尊さ、家族の絆、人と人とのつながりの大切さを、合わせて、ご遺族様並びに戦友の皆様と共に、今後とも末永く、特攻殉国の碑慰霊祭を執り行っていきたいと思っています。

どうか御英霊の皆様、永久に、我が国の発展と平和を見守りいただき、ご遺族様並びにご参列の皆様方へ、ご加護を賜りますようお祈りいたしますと共に、謹んで殉国の御霊の安らかなご冥福をお祈り申し上げます。

結びになりますが、ご遺族の皆様、戦友の皆様並びに御来賓の皆様の、ご健勝とご多幸を切に御祈念申し上げまして、慰霊の辞といたします。

平成二十九年五月十四日

特攻殉国の碑保存会

新谷郷　総代　廣川英雄

第六十七回関西白鴎遺族会慰霊祭に参列して

評議員　長瀬彰孝

一　慰霊祭

五月二十一日（日）初夏とはいえ真夏並みの日差しと高温の中、京都霊山護国神社において関西白鴎遺族会の慰霊祭が行われました。

会長の山田正克氏の周到なご準備のおかげで、行事は和気あいあいのうちにも整斉と行われました。

慰霊祭開始三十分前、この会の伝統行事である軍艦旗掲揚が旧海軍の号令で開始され否応なしに厳粛な気分にさせました。五分前の精神よろしく本殿に参加者が昇段、定刻通り開始になりました。山田会長自ら司会のもと国歌斉唱、修祓と続き、斎主木村宮司による祝詞が奏上。その後安藤衆議院議員の祭文が奏上、秘書が代読されました。その後を受け我が顕彰会が祭文を奏上いたしました。「参照　祭文」　最後に関西白鴎遺族会を代表し山田会長が祭文奏上されました。

引き続き九十五歳になられる海軍飛行予備学生十三期生の加藤氏が奉納謡を披露後、それぞれの会の代表者が玉串を奉奠いたしました。

木村宮司が挨拶をされました。神社には多くの碑が建てられ祭事が行われているが、慰霊祭への参加者が戦後七十年を期に減少してきた。京都への観光客が確実に増えているが、寺社、仏閣へのいたずらが絶えず、維持管理が難しくなってきている。今後も英霊に対する慰霊を皆さんの協力を得て一緒に続け、お守りをしたい。神殿に鉢物は置かないが、特攻花の鉢を置いている。特攻像の近くに地植えをしていたが、心無い人に取られてしまった。この一つだけが、残ったので大切にしていると話された。

最後に参列者全員で同期生加藤氏の指揮のもと「同期の桜」を齋唱し、本殿に於ける祭事は終了した。

神殿前で記念撮影後、特攻勇士之像前に移動、事前の打ち合わせで像設置由来説明を求められていたので、簡単に説明のあと各自参拝の形式で玉串を奉奠、参加者のほぼ全員が奉奠してただいた。

斜面を登り小高い場所にある「白鷗顕彰之碑」に移動、各自参拝ながら高齢者の方も時間をかけ山道を登り、玉串を奉奠された。碑文の中には「・・短期間の猛訓練に耐え、航空隊指揮官として英知と勇気を持って戦い、二四八五名が雲流るる果てに散華されました。」とある、本慰霊祭は関西白鴎遺族会の主催のため陸軍に関する話は出てこないが、特攻隊員として散華された陸軍の英霊にもその気持ちは確実に届いたと思われます。

特攻花の鉢

最後の懇親会では。今回初めて参加された諸団体の方々がそれぞれの会の目的や自己紹介をされ、和気あいあいのうちに、定刻で散会となりました。

二　所見

京都霊山護国神社は招魂社として初めに建てられた社です。

東山通りから坂を登っていくと鳥居があります。

しかし道の流れは隣にある高台寺への道が大きく人の流れも、車もそちらに流れています。また更に神社に近くなっても、歴史ミュージアム館の宣伝看板や建物が幅を利かし、護国神社がひっそりと見えます。市バス内や、ちょっとした観光案内図には高台寺はあっても護国神社の記載がないものがほとんどです。

白鷗顕彰之碑前の山田会長、木村宮司

最近の竜馬ブームによって京都市も少し護国神社に対する態度が良くなってきていると宮司さんからお聞きしました。

祭事開始前、二～三十名の団体が神殿前で参拝後境内の清掃作業に当たっておられ、その内の何人かは慰霊祭参加の名札を付けておられました。護国神社清掃奉仕会の人々です。小学生も親と一緒に参加していました。心ある人たちがおられることに胸が熱くなりました。

全国組織であった白鴎会が解散、関西白鴎会として地域ごとにその後の活動を行い、今回も若い山田会長が会の運営を引き継ぎ慰霊祭の開催に至っています。昨年までの遺族中心だけではなく、今年から同じ志を持った方々に声がけを行い、護国神社清掃奉仕会、ソロモン会、まほろば教育事業団、海軍倶楽部等多くの方々が参加されていました。ただ慰霊祭の準備は山田会長自らご家族を含めて奮闘され、その熱い心と責任感で祭事が執り行われている現状を拝見、敬意を表したいと思います。

今後会の充実、慰霊祭の開催が、時代や、地域の特性で少しずつ変わっていこうと思われますが。我が顕彰会としてもよく連携を取り合い会の充実に努め、ご支援する必要があると感じました。

祭　　文

特別攻撃隊で戦没された、ご英霊の皆様に申し上げあげます。

今年も平和平穏のうちに、私達一同が、ここ京都霊山護国神社の社前に集い、お参りすることが出来ますことに、こころから感謝申し上げます。

皆様方は、70有余年前、我国の存亡に際し、自らの身を賭して、ご家族、ふるさと、そして日本を守るために、散華されました

私達は、皆様方に対し、心からの感謝と、敬意を奉げます。

皆様方の行動のお陰で、現在の平和で繁栄した日本があり、そして、国際社会の中でも、平和国家として、その存在価値が認められ、人類発展のために、貢献してきております。

改めて過去を顧みますと、皆様方は、７０有余年前、空に、海に、陸に、あらゆる手段をもって国の守りに身を捧げ、この日本という国をお守りいただきました。

結果として国は敗れましたが、このことは、我国のみならず、人の世に、燦然と輝く、語り継ぐべき偉業として、残されてきております。

世界の現状を観ますとき、今年も、今日も、たった今も、皆様方の行為が、我国の平和の礎になっていることを、感じずには居られません。また、心ある外国の人々も、そのことを十分認識されております。

我国は、先の大戦で、死力を尽くした戦をしました。その後、この７０有余年の間、武を収め、平和平穏を維持し得てきました。そして、地球上で奇跡といわれるような発展を遂げてまいりました。このことは、世界の歴史上、類を観ないことであります。

この間にも、世界の各地では、民族、宗教、主義主張、国境等による争いや戦争が、絶えたことはありません。今も尚、その戦いは、空間、手段が、広く、強く、高度に強大化した中で、絶えることなく続いております。

その抗争、紛争、戦いの様相は、その物理的能力の拡大が、人類の精神的制御能力の向上を逸脱超越しそうな勢いで、広域化、強大化してきているように伺えます。

これ等の変化の延長線上に予測されるものとは、地球上人類の破滅であるようにさえ伺えます。私達は、その方向にすすむこと、それだけは避けなければなりません。

皆様方のお導きにより、次は、私達がその先頭に立って、努力する立場にあるのではないかと思えてくるのです。

世界の情勢は、今、正に激動の中にあります。

在天の皆様、どうか私達をお見守りください。そして、お導き下さい。

皆様方の、安らかならんことをお祈り申し上げ、祭文といたします。

平成29年5月21日

公益財団法人

特攻隊戦没者慰霊顕彰会

理事長　藤田幸生

平成29年度「千葉縣特攻勇士之像慰霊祭」に参列して

会員　金子　敬志

平成29年5月26日（金）11時から千葉縣護国神社において「千葉縣特攻勇士之像慰霊祭」が催行された。本日は朝から雨が降っていたため、御本殿で執り行われた。参列者は、特攻隊戦没者慰霊顕彰会から小倉理事と私、それに千葉県隊友会会長、千葉県偕行会会長他12名であった。

千葉縣特攻勇士之像慰霊祭は、この像が建立・奉納された平成23年5月26日に合わせて毎年5月26日に催行されているものである。

式は、修祓の後、神官の祝詞が奏上され、その後参列者の玉串奉奠と続いた。

祝詞では、我が国危急存亡の秋、万に一つの生還も期せない特攻に進んで従った事、我が国の現在の平和の礎となったこと等が奏上された。次いで、参列者全員が玉串を奉奠し、特攻戦没者に哀悼の誠を捧げた。

玉串奉奠

最後に、式の進行を務められた竹中宮司が、挨拶をされ、「靖国神社と護国神社は、国のために命を捧げられた戦没者を祀っている、現在の平和は先の大戦の戦没者が礎になっている。私たちはこれを語り継ぎ、引き継いでいかなければならない」との話があった。この後、宮司の案内で、神社の前庭に鎮座している「特攻勇士の像」前に集合した。そして、副碑の裏に彫られている千葉県出身の特攻戦没者、陸軍49名、海軍89名の御霊に対し全員で黙とうを行った後、散会となった。

千葉県特攻戦没者名簿

千葉県特攻勇士之像

第50回予科練戦没者慰霊祭に参列して

理事　小倉利之

一　慰霊祭の状況

若葉が香る5月28日（日）、素晴らしい天候に恵まれ、最高の環境の下、慰霊祭も50回にふさわしい内容で、茨城県阿見市の陸上自衛隊武器学校内にある雄翔館にて予科練戦没者慰霊祭は開催されました。

１０２５、日の丸飛行隊のセスナ機２機が数回上空を旋回したのち、バンクをしながら東の空に消えて、慰霊飛行は無事終了した。

１０３０、司会進行の行方滋子氏により「式典開始」が告げられた。「開式の辞」ののち、陸上自衛隊武器教導隊員による「国旗掲揚」と、海上自衛隊下総教育航空群隊員により、荘重かつ威厳のある「儀仗と弔銃」が行われた。更に武器教導隊員・下総教育航空群隊員による「献火」、海原会特別ラッパ隊のラッパ吹奏による「黙祷」と続いた。

その後、阿見詩吟会師範　佐藤昌司氏による「高松宮妃殿下御歌奉詠」が音吐朗朗と霞ケ浦の式場に響き渡った。

下総教育航空群隊員による儀仗と弔銃

「式辞」は、海原会　堺　周一理事長の代理が「50回目になる慰霊祭は、先の大戦でひたすら祖国と民族の安泰と繁栄を念じつつ、花よりもなお清く散華された同窓の御霊に対して慰霊の誠を捧げるとともに遺された数々の偉大なる戦績を後世に正しく伝承すべく、昭和42年発足させて以来、約半世紀の長さに亘り同窓生が相集い、ただひたすらに感謝と鎮魂のため活動をおこなってまいりました。

陸上自衛隊、海上自衛隊、阿見町の皆様等、ここに御集りの皆様に対しまして心より御礼申し上げます」と読み上げた。

「献花」は音楽隊が静かに演奏する中、ご来賓、・ご遺族・一般参列者多くの人が時間の許す限り行われた。「ご来賓挨拶」は陸上自衛隊武器学校長　市川文一陸将補、太平洋航空博物館顧問　ＧＡＲＹ　ＭＥＶＥＲＳ氏、海上自衛隊教育航空集団司令官　渡邊剛次郎海将より頂きそれぞれ感銘をうけた。「ご遺族の言葉」は甲飛第13期　故海軍少尉　北村十二郎様の甥北村直也様からあり、引き続く「遺書朗読」は海原会参与行方滋子氏が実施、「若鷲の歌奉唱」は同窓生起立して合唱、「奉納行事」は鎮魂歌奉唱として、土浦混声合唱団様が「君らここに甦れ」を合唱し、さらに舞踊「若鷲の歌」を地元婦人会有志が行った。そして「閉式の辞」で慰霊式は厳粛な中、無事に終了した。

この後雄翔館では、短い時間であったが、戦没者の姿を見ようと、皆様は真剣に遺影等を厚い眼差しで見ている姿を見かけた。

会場を体育館に移し、直会では「陸上自衛隊　施設学校音楽隊」の演奏を聴きながら、昔の話は尽きないが、海原会の助村専務理事の「来年もまた、元気に会いましょう。」との言葉で閉会となった。

二　所見

予科練戦没者慰霊祭は、雨の日が多いが、当日は、第50回の記念すべき慰霊祭であり、素晴らしい青空の中、春であるのに、夏の暑さを思わせる日の中で、式典は取り行われた。

半世紀にわたり実施されたこの慰霊祭も、50回ということで充実した素晴らしい内容で変化に富んだものであった。

慰霊祭、前夜祭を土浦市の駅前で行い、又催し物として慰霊コンサートと予科練写真展が行われ、それぞれ内容が充実しており、満足できるものであったとのことであった。

特に慰霊祭は、過去の慰霊祭にはなかった行事がいろいろあり、内容は盛り上がるものとなった。

今回から司会者がアドバイザーの太宰信明氏から、参与の行方滋子氏に交代した。国旗掲揚では陸上自衛隊の音楽隊の演奏ではなく、海原会の特別編成ラッパ隊の演奏で掲揚された。

来賓祝辞には、米国太平洋航空博物館顧問のＧＡＲＹ　ＭＥＹＥＲＳ氏の「日米が戦ったがお互いに相手を称える今では、双方が行き来する仲になり、今回の50周年行事に招待を受け、この会を心から祝福し、英霊に対する心配りを心より感謝申し上げます」との内容で心を打つものであった。

海上自衛隊教育航空集団司令官　渡邊剛次郎海将からは、山口県に所在する小月教育航空群の航空学生（甲種予科練の制度を採用した）３名が教育の一環として参加していることの紹介があった。

土浦混声合唱団が奉納した鎮魂歌奉唱の「君らここに甦れ」歌詞の一部を紹介すると、「ともに励みしますらおが　祖国を護る真心を　誓いて斎（いつ）ありし日の　面影しのぶ友の名に　君らここに　君らここに甦れ」であり、内容も素晴らしく、また、歌と合唱もこみ上げるものが有った。

予科練写真展は、阿見町予科練平和記念館で実施された。「素顔の予科練生」の表題で、厳しい訓練を積んで、航空兵となった予科練生にも子供の素顔があった。３人の予科練生を中心に家族との写真を交え、訓練では見せないその姿を見ることが出来る写真展であった。

今回の第50回予科練戦没者慰霊祭は、御霊に感謝するとともに、参列者が心から、慰霊顕彰を通じ、健全な国民意識の醸成という崇高な目的に向かっていくことを教えてくれたように感じた。

海上自衛隊航空学生

世田谷山観音寺
特攻平和観音月例法要報告
（毎月18日14時より境内特攻観音堂に於いて、参加自由）

平成29年4月18日（火）月例法要
評議員　鮒田　英一

4月の月例法要は、暖かな陽気のもと、定刻の14時から太田賢照山主を含む15名の参列を得て特攻観音堂において執り行われた。やや蒸し暑さが感じられる天候であったが、参加者の熱心な読経、焼香が終わるころには、堂内は清々しい気に満ち溢れていた。

続く本坊における直会には14名が参加。始めに台湾出身の呉会員が献杯の音頭を取った。その際「台湾出身戦没者を祀るところが日本には数少なく、靖國神社以外に広島県の比治山陸軍墓地、東京・奥多摩町の小河内ダム（奥多摩湖）畔の笠松展望園に慰霊碑と慰霊塔が建立されている。先日、奥多摩にお参りに訪れたが、風光明媚な場所にあるものの何かと不便な立地であり、碑そのものを世田谷観音寺にお移しする、あるいは、同じような慰霊碑をここに建立させてもらえればとの思いがある」と胸の内を語った。（筆者注　呉会員は触れられなかったが、台湾出身戦没者の慰霊施設は、これらの他に沖縄県摩文仁にも建立されている）引き続き初めて参列された女性二名から御挨拶があった。鈴木さんからは、「近所住まいであり普段着ながら立ち寄ってみた。祖父が先の大戦で軍に志願して満州に赴任したが、後方関連の職種であり、前線の大変な苦労はせず無事帰国したと聞いた。60代半ばで他界したが戦争の詳しい話を聞くことはなかった。戦争のことをもっと知っておきたいとの思いから、近年多くの戦争関連の本を読み、近くの世田谷山観音寺に特攻の慰霊碑があることを知り今日の法要参加につながった」との話があった。小山さんからは「世田谷区在住で三軒茶屋付近まで来たことから、月例法要があるとは知らず立ち寄った。以前、本寺に参拝したことがあるが、その折は特攻観音の由来を詳しく知ることはなかった。戦争との関連で三人の近親者がいる。先の大戦で、叔母が看護婦としてフィリピン野戦病院で従軍した折、流れ弾に当たり、その弾に毒が塗ってあった為、体内に毒がまわると死ぬと言われて片腕を切断せざるを得なくなった。戦後、叔母に会うと冬なのにいつも半袖姿であり子供心に不思議な思いがしていた。戦争で大変苦労した叔母だが、今も愛知県渥美半島に健在で暮らしている。また大叔父は満州で戦死しており、愛知県内に屏風を立てたような大きな墓がある。また叔父は回天部隊の隊員として昭和20年8月16日に出撃予定であった。叔父は、終戦となり出撃を果たさず悔しい思いをしたと言っており、酒を飲み酔いが回ったときには、往時を思い出し、先に逝った戦友に申し訳ないと涙を流している姿を間近に見た」との話があった。廣嶋会員からは、連絡事項が三件あった。一件目、「去る4月8日、杉浦喜義・元海将（元海上自衛隊佐世保地方総監、海兵73期、92歳）が心筋梗塞のため都内で逝去された。謹んでご冥福をお祈りする。（杉浦海将は廣嶋会員の令兄・故廣嶋忠夫様と同じ６０１空攻撃第１飛行隊に勤務し、会報第１１２号（平成28年11月）に講演録『特攻で散華された先輩、戦友の志』を寄稿されている）」　二件目、「３月30日付産経新聞のコラム『葛城奈

海の直球＆曲球』に、靖国神社で実施された特攻隊全戦没者慰霊祭（３月25日）の模様が紹介されていた。その中で、筆者が慰霊祭において３番として合唱された『同期の桜』の歌詞に初めて触れたこと（『貴様と俺とは　同期の桜 離れ離れに散ろうとも　花の都の靖国神社　春の梢に　咲いて会おう』）などが書かれている」三件目、「３月26日付産経新聞の曽野綾子氏によるコラムに『教育勅語全否定でいいか』と題し、昨今世間をにぎわせた森友学園問題に関連して否定的に扱われる傾向にある教育勅語の中には、今もなお尊重されるべき大事な徳目が謳われている趣旨が書かれていたので、大切なことと思い紹介する」

木島さん（おきあがりこぼし芸術祭主催）からは、「２年前に渋谷区文化センターで公演した、特別攻撃隊『回天』の隊員を主人公とする舞台『たからモノ』を６月末から３日間、『座・高円寺』という劇場において再演する。以前も公演の前後に参拝したが、今回も舞台の前にお参りに訪れた。いつの日か、回天の基地であった大津島を訪ねてみたいと思っている」との話があった。

大穂顧問は、本年春の靖国神社における特攻隊全戦没者慰霊祭において、世田谷コール・エーデ合唱団、特攻隊慰霊顕彰会合唱団による奉納演奏を指揮された。これに関連して同顧問からは「当初、何を奉納演奏しようか迷ったが、『ふるさと』二題とし、一曲は有名な『故郷』（高野辰之作詞）、もう一曲として野上彰氏作詞の『ふるさと』を選んだ。楽譜の入手に苦労したが、参会者の方からは聴いて感激したとの感想を多くいただき嬉しく思った。また参列した教え子（５０歳台後半）から、靖国神社で君が代を他の参列者と一緒に斉唱でき、自分も慰霊祭に積極的に参加できたとの思いを強くしたというメール連絡をもらった」こととなどが紹介された。　恵淳住職からは「ここの法要に集う人たちは、法要に参加する動機、きっかけなどは各人各様で、言わば入り口こそ異なるものの、出口として通ずるところは、特攻隊員戦没者に対して慰霊の誠を捧げるという共通の思いであり、大切な縁でつながっている」などの話があった。引き続き、直会が終わる１６時ごろまで各参加者はそれぞれ熱心に語らいの時を持つことができ、人数こそ決して多くないものの、いつもながら充実した月例法要であった。

平成29年５月18日（木）月例法要

事務局　池田　康博

今日は上空に寒気が入り不安定な天気が予想されていたが、果たして世田谷周辺は、２時前から雨が降り始め、３時前後には激しい雷雨となった。そういう中、法要には９名が、直会は７名が参加した。法要は、定刻の２時から、恵淳和尚が導師を務められ、山主太田賢照和尚も参加された。いつものように「魔訶般若波羅蜜多心経」及び「特攻平和観音経」を参会者全員で読誦し、特攻戦没者の御霊安らかなれと祈り、約20分で滞りなく終了した。

直会は、境内にある旧小田原藩代官屋敷本坊で行われた。参加した７名を前に、恵淳和尚の発声による献杯の後、参会者の大穂会員から、４月に亡くなった顕彰会の飯田前編集長に関する話が披露された。

飯田前編集長のこと

飯田前編集長は、平成29年４月19日に池袋の東京芸術劇場コンサートホールで

演奏された、わが国初の交声曲「海道東征」を鑑賞することを楽しみにしていたという。

「海道東征」については、大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会の機関紙である「慰霊」第40号（平成29年４月１日）に飯田氏本人が掲載している。それによれば、「海道東征」は、昭和15年の皇紀２６００年を記念して作曲されたもので、日本建国の神話、いわゆる国生みの伝承から神武東征にいたるまでを吟唱する演奏時間50分に及ぶ大作とのこと。

戦後はずっと封印されてきたが、作曲者の信時潔没後50年となる平成27年11月20日、信時の故郷・大阪ザ・シンフォニーホールで、戦後初めて演奏された。ところが、これが追加公演を行うほどの人気で、翌年にも再演され大好評を博した。そこで、東京でも是非にという熱い期待に応えての公演だったとの事である。

大穂さんは、飯田氏が楽しみにしていた、まさにその当日に亡くなったという知らせを受けて、「同じ日に」というあまりの偶然にショックを受け、告別式にも行ったが、その後ずっと気分が落ち込んで優れなかったという話であった。

恵淳和尚は、亡くなった日と演奏会の日が重なったのは、「飯田さんの体はもう動けなくなっていたので、きっと魂がコンサートを聴きに行ったのかもしれません」と言われた。

故人の供養と親しかった人達の気持ちの整理のための、やさしい言葉だなと思うところであった。

私からは、会報５月号は、飯田前編集長が亡くなったため遅れており、会員の手元に届くのは６月の初めになる事、また、飯田氏は亡くなる数日前まで会報の編集・校正に携わっていた事、そして、その５月号には彼の記事が３編掲載されており、それが遺稿となってしまった事を話した。

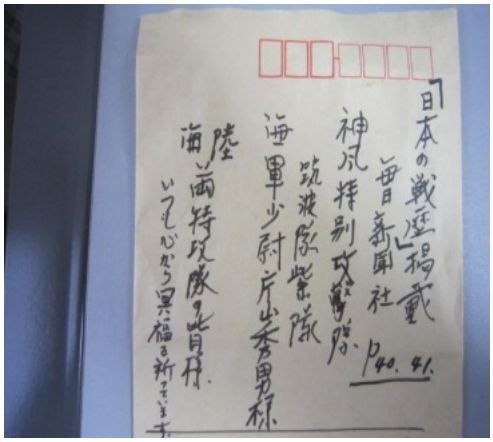
ある婦人の特攻隊員への思い

また、恵淳和尚は、４月の月例法要に参列されたという93歳のご婦人の話を披露された。

彼女の話によれば、20歳代の頃、兵器行政本部の雇員として働いていて、板橋の鳥越寮に女性のみ20名位で住んでいた。そこには、寮長（女性）の息子さんの友人で、片山少尉他数名が遊びに来ていた。そのうち、彼女の友人の幸江さん（仮名）が、面会に行ったり、手作りの草餅を届けたりしていたという。そして、いよいよ出撃という日に、幸江さんが「今日出撃するのよ」と、泣いていた様子が今も思い出され、自分も当時を思い出してはいつも泣けてくるのです。という。その後、鳥越寮は３月に全焼し、幸江さんとも連絡がとれずじまいになってしまったのだそうだ。

今日、お参りに来たのは、以前、新聞で世田谷観音の事を知り、切り抜きを大切に持っていて、是非お参りしたいといつも思っていたところ、今回、長男が連れて行ってあげるというのでお参りさせていただいた。ということである。

そして、彼女が差し出した御宝前の袋には次の文字が記されていた。（写真参照）



『神風特別攻撃隊筑紫隊紫隊
海軍少尉　片山秀男様
陸・海両特攻隊の皆様
いつも心から冥福を祈っています。』

戦時下に生き、間近に悲しい別れを見た人の、そして、自らの将来への夢を断ち、国難に殉じた特攻隊員に対する、心からのお祈りの言葉だと心を打たれたことである。

おわりに

直会では、このほか、賢照和尚が、最近起こった出来事から、忠君愛国の精神が失われてきているという話や、横浜の神社の総代もしているという台湾出身の呉会員が、90歳を過ぎてもなお矍鑠とされていることに関して、「用件はスケジュールが開いている限り入れて、出かけることにしている。」という言葉に、なるほどと思われることであった。この他、大穂会員の戦時中の話や演劇に関する話等、興味深い話が続き、時間が過ぎるのも忘れ、直会は予定時刻を過ぎ、４時近くになって終わった。

〈追　記〉

片山少尉は、大正10年生まれの滋賀県出身で、大阪商大14期生であった。

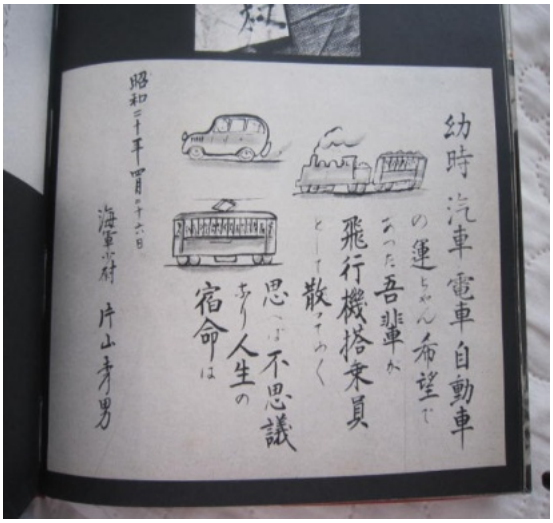
彼は、先のご婦人も「とても立派な方に見えた」と言っていたそうであるが、出撃の３日前に書き残した次の色紙を見てもそれが窺える。達筆な筆字で漫画を添え乍ら、特攻隊員としての気持ちを綴っている。

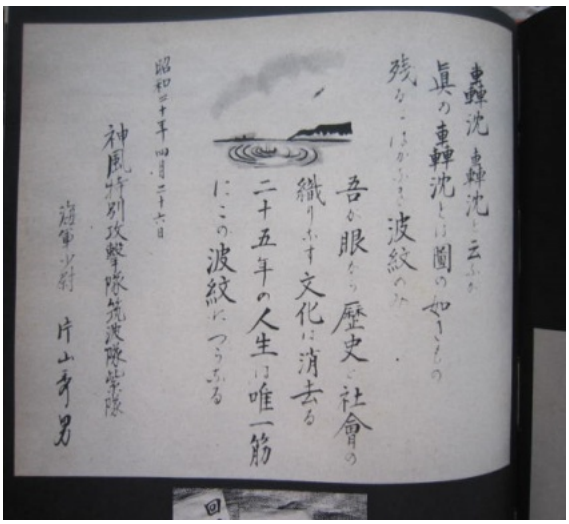
そこには、彼の、敵艦を必ず屠るという強い決意と、その一方、まだ若い身空で、人生を中途で終える無念さも滲んでいるように思える。

片山少尉は、零戦のパイロットとなった。「爆戦」という、水面に水平に近く石を投げると何回か水面上を跳ねる原理を応用し、二百五十kg爆弾を積んで、超低空、最高速度で敵艦に近づいて爆弾投下する、いわゆる反跳爆弾戦法をおこなう第４筑紫隊の隊員であった。

第４筑紫隊は、昭和20年４月29日、菊水第４号作戦において、沖縄東方洋上の米機動部隊を索め、隊長の米加田中尉以下５機で鹿屋基地を発進し、沖縄東方65浬で敵艦に突入し散華した。享年23歳。

合掌





平成29年6月18日（日）月例法要

評議員　岩成　真一

今回の月例法要は、梅雨の時期ということもあり、雨に包まれた法要でした。参列者は23名であり，堂内がほぼ満席となりました。

はじめに、太田恵淳住職から、今回の月例法要において、本年４月19日にご逝去された、当顕彰会の評議員、機関誌編集長としてご活躍いただいた飯田正能様の法要を一緒に執り行うとのお話があり、読経が始まりました。静寂の中に凛と張り詰めた空気が辺りを包み込みました。特攻平和観音様の周りに英霊の皆様を感じながら「特攻平和観音経」を読経させていただきました。

その後、更に強くなってきた雨の中、場所を世田谷山観音寺本坊に移し、直会となりました。太田賢照山主を囲んでの直会、衣笠専務理事の献杯に始まり、始めての方のお話などが続きました。

飯田評議員・編集長の幼馴染でもあり、お兄様が海軍特攻隊員であった廣嶋様から、飯田様のありし日の思い出、金子編集長から引き継いだ者としてのお話などがありました。

臼田理事からは、お父様が飛行教育をなさっていた桶川飛行場の保存についてのお話がありました。熊谷陸軍飛行学校桶川分教場では、１９３７年(昭和12年)６月の設置から１９４５年(昭和20年)２月の閉鎖までの間、少年飛行兵や学徒出陣の特別操縦見習士官など、延べ１，５００～１，６００人の航空兵の教育が行われました。その後、戦争末期には、特別攻撃隊の訓練場となり、昭和20年４月には特攻隊員12人を鹿児島県の知覧特攻基地へ送り出しました。桶川市では、平成26年９月に基金条例を制定し、桶川分教場跡地の保存整備及び管理することとしました。臼田理事には、８月５日（土）に靖國会館にて講話をお願いしています。

その他、昭和17年に発売された戦時歌謡のお話などがありました。

月例法要の前に、本坊にて、水町理事を講師として「特攻隊員の心情」山本卓美中尉の日記（昭和19年10月18日～12月６日）を勉強しました。山本中尉は、昭和19年12月、原町飛行場で訓練した「屠龍」で、フィリピンのレイテ湾の米艦隊に特別攻撃を敢行、散華されました。日記を読みながら考えることも多く、今回の特攻平和観音月例法要会がとても印象深いものになったと感じています。

山本中尉の話から、本誌（83号）に、鎮魂賦「わが心の花吹雪」他　―特攻の語り部として―　を寄稿いただいた会員の高橋圭子様の近況についても話が及びました。高橋様は、女学生時代に郷里福島県原町の陸軍原町飛行場で出会った特攻隊員の方々との思い出を後世に伝えている語り部です。原町飛行場は、昭和15年、熊谷陸軍飛行学校の所管として福島県南相馬市に開設されました。昭和46年８月15日、福島県南相馬市陣ヶ崎公園墓地に、原町飛行場関係　戦没者慰霊碑が建立されました。原町飛行場で教育を受け、後に特攻隊員として戦死された方は14隊、52柱に及びます。毎年９月23日に慰霊祭が行われます。

各地の慰霊祭に参列する時に、特攻隊員の皆様のお気持ち、残された方のお気持ちなど、その土地の慰霊顕彰に係る現状を理解するようにするべきだと感じた月例法でした。皆様方で後片付けをするうちに、雨も小降りになり、散会となりました。

会員投稿

「～に信頼し」の「日本国憲法前文」

会員　石垣　貴千代

今日5月31日の産経新聞に、清湖口敏氏が紙面横幅いっぱい3段抜きの記事で「国語逍遥」を書かれていた。憲法前文についてである。日本国憲法が5月3日で施行後とうとう70年たった。”とうとう”は、法律の専門家でない一般国民の眼から見ても問題が多い現在の憲法を、解釈を変え続けながら文言は変えないという一種の逃げで、70年を過してしまったという不完全燃焼感である。

新憲法がどんな状況下で作られたかを、戦後生まれの中学生も本当はチラッとでも知っているべきだろうと思う。状況はどうであれ、良いものは良いんだという平和憲法擁護派に言いくるめられて、問題を考えるリアルな目線を失ってしまっている。だから”憲法改正”を言えば、直ぐに”戦争反対”を言い立てて、訳の分からないデモをやる。思考力を抜き取ったのは大先輩であるべき大人ではなかっただろうか？

昭和20年9月2日に、日本は降伏文書に署名した。占領軍の最高司令官としてマッカーサー元帥は、9日日本管理方式を発表する。そして憲法改正の検討に着手。近衛文麿は「帝国憲法改正要綱」を昭和天皇に報告。森戸辰男他様々の憲法改正草案が出る。松本国務大臣が”天皇の統治総覧権は不変”の憲法4原則を発表。GHQは12月15日戦犯逮捕を指令。戦犯とされた近衛公は12月16日自殺。翌21年5月3日東京裁判が始まる。6月吉田首相は衆議院で、”自衛のための戦争も交戦権も放棄”と答弁した。そして11月3日に新憲法が公布される（施行は翌年5月3日）。日本側の憲法草案を旧態依然と断罪して、依拠すべき英文草案を示したのは有名なエピソードだ。日本側草案をスクープしたのは毎日新聞と聞いたが事実だろうか。複雑な思いを禁じ得ない。

つい余計なことを書いてしまったが、今言いたいのは新憲法が生まれた不条理な状況ではなく、憲法の「前文」の、日本語で育っている日本人なら誰でも気が付くはずの変な日本語のことである。随分前から、石原慎太郎氏が”平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して・・・”じゃなくて、「・・・公正と信義を信頼して」だろう？と言われてきた。しかし清湖口敏氏が「国語逍遥」で書かれているように、”信頼する”には、～を信頼する、も、～に信頼する、も両方あるのだ。石原氏が繰り返して指摘されるので、疑問に思って調べたことがある。広辞苑、大辞林、金田一の学研国語大辞典には、”信頼に応える”等、用法は出ているが、～に信頼する、の用例は無い。しかし、小学館の「日本国語大辞典」⑦７３１ページ”しんらいの項には、ちゃんとある。ビックリしたのは、「歩兵操典（１９２８）第１２４、「自己の銃剣に信頼し最後の勝利を求ることに勉むへし」という用例だった事。一寸忘れられない。

しかしそんな、て、に、を、はの問題ではなく、文脈の中で信頼する対象が、”平和を愛する諸国民”となっている事だ。そんな国民がどこかに居ると想定すること自体、思考停止の夢物語だ。現実を無視した怠惰な存在が、無償の安全をいつまで享受できるだろうか。平和憲法のお

蔭で平和であったと錯覚することで、日本人が失ったものは大きいのではないかと思う。

２段落目の文を例に日本語の問題に戻れば、「日本国民は、・・」から「崇高な理想を深く自覚するのであって、」という歯の浮くような見っともない表現をおくとしても、この文頭が「…我らの安全と生存を保持しようと決意した。」の文末に論理的に繋がらないではないか。作文した人は、美辞麗句の羅列に酔っていたとしか思えない。言葉には魂がある。取り分け憲法のような国民精神を謳うものであれば、日本語の底から湧き上がるリズムがなければならない。

山本夏彦氏の言われるように、「私たちは、ある国にすむのではない。ある国語に住むのだ。祖国とは国語だ。それ以外の何ものでもない。」

山本夏彦著　「完本　文語文」より

魂の無い、精神の無い憲法なんて国民の姿たり得ない。言葉の力が解らなくなって憲法をいじくっている我々は、いったい何をしているのだろうか。

万世特攻平和祈念館を見学して
（お願い）

会員　町田志都香

６月に南九州地方の特攻隊出撃基地の幾つかを訪ねてきました。その中で鹿児島県薩摩半島の東シナ海側にある「万世特攻基地」も見学しました。

ここは終戦間際の昭和19年末に秘密特攻基地として開設され、終戦間際のわずか４か月で２０１名の隊員が特攻に出撃したと記録されています。

この史実を後世に伝えるために、同地に平成５年にオープンしたのが「万世特攻平和祈念館」です。２階には２０１名の方々の遺影や肖像画が飾ってあり、見学していたところ、２０１名の中の以下の３名の方には遺影も肖像画もなく、記念館から「３名の方のご遺影を探しています。お心当たりの方は万世特攻平和祈念館までお知らせください」と表示されていました。

特攻隊戦没者慰霊顕彰会の事務局で資料を探して頂きましたが見当たりません。会員の皆様の中でお心当たりの方が居られたら万世特攻平和祈念館の方にご連絡いただきたく会報に投稿させていただくことと致しました。

階級等に疑問のところも有りますが、祈念館の表示通りに記述します。

○　勝俣喜一郎　少尉　30歳
神奈川県出身
66戦隊
S20・6・4　出撃準備中に殉職
下士官

○　宮川喜一　伍長
55戦隊
S20・6・17　小牧　戦病死
特幹１期

○　森　弘　曹長　25歳　東京出身
66戦隊
S20・4・1　戦死　召下91期

お心当たりの方は「万世特攻平和祈念館事務局（☎0993-52-3979）」にご連絡お願いします。

さいなら

飯田正能　編集人
遺族会員　廣嶋　文武

平成29年４月19日　飯田君は卒寿を前に静かに永遠の眠りに逝ってしまった。悲しい。寂しい。何故だろうか？二人には特別の秘密があった訳ではない。たった一つ小学校の同級生であっただけだった。

飯田君とは、旧福岡県宗像郡津屋崎尋常小学校（現福津市立）に五年生で転校して以来、79年の昔に遡る。母校は創立１３０年の歴史と伝統を誇り、現在７９８名の在校生とＦＡＸで教えて貰った。何処から転校して来たのか聞きもしなかったが、実際とんでもない秀才がやって来たぞが第一印象であった。農家の小生にとって都会の子と知ったのである。われわれは、４年生迄は、Ｎ君が担任の先生の如き所作で男児生徒を纏めて来ていた。ところが飯田君が転校して来てからの５年生６年生の２年間は、担任の松尾稔先生のすばらしい御指導の下、彼が最上級生として、万事模範を示してくれたお陰だと今も脳裏にとどめ置くことが出来る。

飯田君に教えたもらった最初は、なんと中国語である。当時日支事変で、飯田君の父上は、北京か天津に駐屯されていたとのこと。早速教えて貰ったのが、１，２、３、４、５、６、７、８、９、10（アルサン スー ウーリィツチー パージィウシ）であり、小生の唯一の中国語になっている。

次に６年生になって今でも脳裏に蘇って来るのは、卒業記念学芸会と植樹である。

「楠公桜井の別れ」は楠正成は飯田君で、楠正行は誰だったか忘れてしまった。小生は家来の一人で、初めて剣道具を着用した。そのせいで中学生になって剣道に熱中したが、堂々たる風格ある楠公を全生徒が感銘したことは言う迄もない。

も一つは記念植樹であった。飯田君の家の近くの宮地嶽神社の裏手に桧を、偶然にも飯田君の隣に植える事となり、将来の２人を占う大事なものと丹念に植えた。大きく成長してくれと念願していたのに、その後山火事で消失し、再会することが出来ず残念至極であった。

三つ目は、幸い同級生で県立宗像中学校（現兼宗像高等学校、平成31年で創立１００周年）に入学出来たのは11名で、末席に小生もいた。

松尾先生に連れられ、学校長の薄俊一先生に「宗中に入学する事が出来ました」と報告に行った。薄校長先生は色々仰ったが、アルファベットが言えるかと問われた。誰一人言えなかったが、今考えると、飯田君なら言えたのに、10人の為に発言しなかったのではないかと77年経った現在考えているし、これが飯田君のすばらしいやさしい人格だったと回想している。

前から、純一君、飯田君、小生

この写真は、小生が宗中入学一年生のだぶだぶの制服制帽と、やっと父が買っ

てくれた新品の自転車に、飯田君、従弟の純一君との寛いだスナップだが、同級生とは思えない都会育ちで、ここでも秀才とみられる光景である。

秀才の飯田君は、宗中２年終了後、大阪陸軍幼年学校、陸軍士官学校（61期）と進んだが、終戦。この間、小生は会う事もなかったが、確か昭和22年頃、ひょっこり合う機会があった。当時、福岡高等学校に復学し、九州大学に進学、卒業とエリートコースを進んだ。年月はいつの間にか昭和32年、小生は「広島動物病院」の小動物専門で開業、結婚していたので、同期宗中22回卒業の在京の４人を招いて、昭和34年（１９５９年）の正月を祝ったが、やっと飯田君が法務省に勤務している事を知り、大いに往時を語り合って飲み騒いだのだった。

それ以来会う事もなくお互い多忙の時代であった。偶々患者さんに、女優の久我美子さん宅があり、御主人の平田昭彦さん（陸士60期）との会話の中で、名簿をめくって一つ後輩ですねと確認して貰ったりした・・・。

旧６０１空のK-1会の宮下さんに特攻観音のある世田谷山観音寺に参詣する機会を紹介して貰い、当時の最上理事長さんに推薦されて「財団法人　特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会」の理事になった。そして今日迄御世話になっている。当時「特攻」の編集人は、陸士52期の田中賢一様で、時々うめ草にでもと投稿させて頂いていた。体調を崩されたとの事で、なんと協会評議員だった飯田正能君が、名編集長の後任として、秀才の登場となり「やーやー」と久闊を叙したのであった。

思えば田中前編集人は「特攻」70号迄、飯田君は、71号から１１４号迄活躍された。財団法人から公益財団法人と変わって、慰霊顕彰会として再発足して以来、編集人と言うより、第一線の記者となり、戦時中や平和な今日の特攻隊像を探求して、事実を確実にし、これからの展望を追及して止まずの編集人であった。平成19年から平成29年迄、実に10年に及ぶ「特攻」という遺産を最高最大にされた御功績を尊敬せずにはいられないと思う。

去る６月18日特攻観音堂の月例法要には、多数の理事、評議員の御参加があった。この際、太田山主様の特別のお計らいで「飯田正能之霊」が特攻隊員６８１４人とともに礼拝した事は、感謝と感激の、忘れられない一日であった。このような法要は今迄無かった事で、飯田君は、もって瞑すべきだろう。

飯田君よ。当日の直会の時に小生は、「飯田君と僕は『月とすっぽん』だった」と発言したら、帰途、山主に「あの言葉は何時頃からですか」と問われたが、僕は飯田君に会った小学生からを想起して、いつも思っていたんだよ。

サイナラ　飯田正能君　いずれあの世で、二人ゆっくり語り尽くそうよ。

終

●追悼　飯田正能氏●「父と仰ぐ師匠・硫黄島での出会いと回想」

会員　西田雅弘

冒頭に、故飯田正能氏逝去の報に接し故人の生前の労を労い、教えを頂いた若輩として衷心より安らかなるご冥福を祈り、その想いを生涯伝え続けていくことを誓う。感謝、拝礼、合掌。

以下は飯田師（以後師と添える）との出会いに始まり、その後のご厚誼の一端を紹介し、彼への追悼寄稿とさせていただく。読者各位の御耳目を汚すことをお許し頂きたい。

平成23年度厚生労働省の行う硫黄島戦没者遺骨収集帰還第二回特別派遣事業に

応募。選抜され学生ボランティア団体所属で初参加した霞ヶ関での結団式での自己紹介は今でも鮮明な記憶として脳裏に残っている。対面で厚労省政務官を初めとする外事室幹部が注視する中、参加団体の団員達が日本遺族会、硫黄島協会、小笠原村旧島民の会・・・と順次自己紹介をしていく。年端も行かない未成年の学生達が多く参加する中、我々「国際学生ボランティア協会」の順が回ってきた。50代も半ばの筆者が所属団体名と氏名を名乗った途端、おそらくご遺族であろう年配の方々の奇異の目がこちらに集まるのを感じた。中年真っ盛りの３名の「学生団体」からの参加者をどういうふうに感じられたのであろうか。そんな中、「大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会」の参加者の番に。漠然と、若者は 学生団体、高齢者は遺族団体出身だと思い込んでいた小職は、３名で参加されたこの団体からの参加者の自己紹介を聴き漏らすまいと努力した。そこでの飯田師の要旨は次のような内容だった。

「大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会」の現組織・沿革・参加団体・趣旨。そして今回の参加に至った経緯と参加人数等に及び、かなり長く詳細に述べられた後、最後に「特攻隊戦没者慰霊顕彰会」所属参加者としての自己紹介と参加の思いを述べられた。そして最後に「是非皆様、私を高齢者と考えての無用なご配慮による分け隔ては決してなさらないで頂きたい。期間中全身全霊を持って頑張りたい。」という内容に、彼の履歴を知る由もなかった当時、そのお言葉に鮮烈な好感と氏の決意を感じ取った。

結団式終了後バスにて入間基地、Ｃ－１３０にて硫黄島に。そこではこの島における収容活動熟練団体を中心に作業は３班に別れ団体行動に。飯田師とは同じ班になった。１週間に満たないたった数日間ではあったが起床から消灯までほぼ全ての時間帯同行させていただく。特に食事時には、飯田師、大学生のＳ君（現在当時の夢がかない、静岡県下の消防救急救命士として活躍）、大学院生の酒匂君（現在九州某公立病院薬剤師・当団体所属）、そして筆者の４人が毎食ごと同席、摂食中は飯田師から博識極まる色々な話を聴かせて頂き、この上もなく我が息子達のように可愛がって頂いた。そしてほぼ毎回島の食堂職員から「食堂閉めますよ！早く食べてください。」と言われるまでその時間を楽しんだ。

筆者 が大阪出身というと河内長野時代（陸軍幼年学校ご在学中）の余話や、酒匂君が防大出身というと当時の士官学校と現在の防衛大学の違いなど、解り易くそして全てに数字を添えられ、そのご記憶の確かさに感嘆したものである。ご家族の話にも及び、ご尊父の軍歴やご子息の近況、就中、琵琶湖周航時竹生島にて夜明かしの危機に瀕しかけたこと等、我々を家族同様に回想談等を話され、飯田師ならではの極めて詳細な話題を楽しみにさせて頂いた。更には当時の世相、物価水準、陸士在学の経費やご家計の事情に始まり、ご母堂が持たせてくれた軍刀拵えの鎌倉古刀で辛抱堪りきれず野竹を切った途端刃毀れした回想談等は、青少年時代の飯田師の才識や茶目っ気を想起させていただくには充分であった。

集団埋葬地での実作業でこんな想い出がある。たった数日間の作業で１８９柱のご遺骨を収容したある日、筆者の横に居られた飯田師が呻かれた。陸軍鉄帽に穿いた銃弾痕を視て突然、「貫通銃創だ・・・。」。そしてその直後から始まった作業休憩時間中もお一人蹲って涙を流されていた。察するに余りある。生徒として終戦を迎えられた旧軍人としての同士愛の慟哭に

聴こえた。傍らに寄る術も無かった。その後は時折、休憩時間とはいえ、炎天下で独り円匙を握り作業されていたお姿が脳裏に蘇る。

務めを終え離島二ヵ月後の五月、千鳥ケ淵戦没者墓苑にて拝礼式の際、我々の多くは再会を果たした。S君、酒匂君、飯田師、そして筆者の４人も久々に一堂に会した写真におさまった。厳密に言うと 渡島時は携帯電話機や撮影可能な機材は一切持参禁止されたので、この時の写真が最初で最後の物になった。離島後３ヵ月後に急逝した父と、体型も表情も良く似た飯田師との写真は今でも我が宝である。

その後上京の機会有る都度お声掛けし、靖国の境内でよくお会いした。８月15日の全国戦没者追悼式当日や、その後筆者がライフワークと決めた硫黄島戦没者遺骨収集事業参加での上京時、そして個人的に友人の戦史調査等の依頼をした際等々、当顕彰会事務所や遊就館内、そして神苑内等で再三再会した。偕行文庫の幹部やいろいろな方々をも紹介頂いた。氏とは千鳥ケ淵戦没者墓苑や靖国以外では終にお会いすることは無かったが、それらが一番ふさわしい場所であったと思う。

お会い する都度、いつも資料の沢山入った重い手提げ袋を持参されていた。ある時遊就館内で海軍カレーをご馳走になった折、その一部を見せていただいた。筆者も所蔵する某新聞社発刊の戦時の写真集数冊であった。「陸士陸幼」特集の写真記事の中に、生徒であった飯田師のお姿も二三枚掲載されていた。そして、「この写真撮影の直後艦載機にて掃射された。」とも言われた。当事者で無ければ語れない貴重なお話に、聴く側として感動したのは言うまでも無い。

最後に話したのは電話であった。本年４月13日に４日間の皇居勤労奉仕を終え数日間関東に滞在、帰宅後報告の連絡をした。彼は携帯電話にすぐに出ていただいた。しかし、お声は聴き取りにくく、明らかにご調子悪く、そして内容もご家族 や我々若輩に対しても感謝の語が多く、長く話すのは御身体に触ると考えいつもより短時間で通話を終えた。最後は「飯田さん、ご体調に触るので改めてまたかけます。ご自愛専一に。では、また。」であった。「ありがとう、ありがとう。・・・活動よろしく・・。」の声が切なく耳に残っている。彼の御意に悖る事無く、摺鉢山山頂の第一第二御盾航空隊ゆかりの硫黄島のみならず、先の大戦で命を賭された特攻隊員や戦没者の慰霊事業参加を終生続けていく事が自身にできる慰霊の最大命題かもしれない。

後日ご逝去を知らず、今年の拝礼式会場にてお会いした当顕彰会役員の方に伺ったところ、「飯田さんは４月に鬼籍に入られました。」との言葉に驚愕動転。指折り数えながら先の電話通話は恐らくその日ではなかったかと傷心の極み、還り来ぬ恩師への追悼の想いの大きさに堪えきれず寄稿させていただく決心を致した所存。貴重な紙面を割き、これは自身だけの単なる想いだけの寄稿であり、前号の故人のご立派なご遺稿には対する価値も全く無い稚文ではあるが重ね重ねお許しいただきたい。

安らかなるご冥福を衷心より祈念し、改めて感謝、拝礼、合唱。

寄稿者：特攻隊戦没者慰霊顕彰会会員
（国際学生ボランティア協会・日本青年遺骨収集団・硫黄島協会阪神支部にも所属）

事務局からの報告等

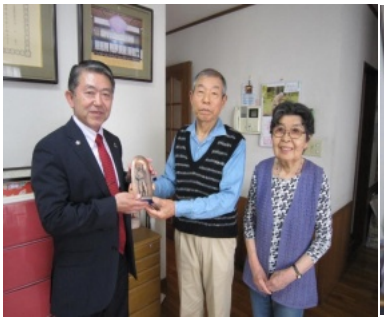
特攻像制作の内山氏に感謝状贈呈

事務局　池田康博

特攻隊戦没者慰霊顕彰会（理事長：藤田幸生）は、平成29年6月7日（水）、内山美術鋳造研究所の代表取締役である内山昇氏に対し、長年に亘る「あゝ特攻勇士之像」制作の功労に対し感謝状を贈呈した。

内山氏には、平成19年以来16体もの特攻勇士之像を制作して頂いた。しかし、氏によれば、「この間、諸経費の漸増等があったが、特攻勇士之像だけに、奉仕の気持ちから値上げもせず制作してきたところであるけれども、年齢も77歳になって体力的に特攻勇士之像のような大きいサイズの仕事が無理になった」こともあり、近々廃業届を出す予定とのことで、この度の贈呈になったものである。

当日は、所要があった理事長に代わり、岩﨑副理事長が、北区赤羽北の、工房が隣接する内山氏の邸宅を訪れた。応接室に案内され、像製作の苦労話、氏の紹介で後を引き継ぐ工房の話などに花が咲き、和やかな雰囲気の中、奥様にも同席して頂き、感謝状と記念品をお渡しし、これまでの感謝と、ご夫妻の益々のご健勝を祈りつつ帰途についた。



岩﨑副理事長と内山氏ご夫妻

感謝状贈呈

「あゝ特攻勇士之像」は、日本の陸・海軍が実施した特別攻撃隊の隊員の姿を象徴的に表したもので、当顕彰会は「特攻建立事業」として、全ての都道府県の護国神社に奉納することを目標に活動している。

これは、大東亜戦争において、約六千四百名にも及ぶ若者が、祖国を、故郷を、家族を、愛すべきもの全てを想って航空、水上、水中、空挺特攻等に命を投げ出して戦った、その精神を思い起こし、忘れることなく、末永く日本人の心として語り伝えていくことを目的としているものである。

［参考］

靖國神社参集殿の横、遊就館前の広場に、戦没馬慰霊の像がある。大東亜戦争において百万頭もの軍馬が、戦場を駆け巡り、屍を野に晒した。彫塑家の伊藤国男氏が、これら軍馬の鎮魂のため私財を投じて制作したものであるが、鋳造は、内山昇氏の父君、内山嘉一郎氏である。

毎年4月7日を「愛馬の日」として慰霊祭が行われている。

戦没馬慰霊の像

平成二十九年度第一回研修会報告

評議員　及川　昌彦

平成29年４月22日（土）今年度第一回研修会を、館山（藤田理事長のお膝元）で行いました。当日の参加者は19名、六台の車に分乗し行動しました。

研修会の行程としては、10時30分、ＪＲ館山駅に集合し海上自衛隊館山基地に移動。第21航空群司令の益田徹也海将補（防大27期）自らの基地説明後、資料館見学・管制塔見学・救難訓練展示及びヘリの見学等普段では体験できない事をし、防衛の何たるかを学び、集合写真を撮影後基地を後にしました。

その後、益田群司令を交えての昼食。和気藹藹と会員一同懇談をしておりました。

昼食後は、赤山地下壕見学・掩体壕見学・震洋壕跡見学と続き、安房神社の海軍落下傘部隊碑に手を合わせ、館山海軍砲術学校跡地及び館山砲術学校碑を見学し解散となりました。

解散後時間のある方達で、館山駅近くの喫茶店で反省会を兼ねた懇談会を行いました。

今回の研修には理事・評議員以外の一般会員９名の方の参加があり、一人では経験できない事・体験できない事ができたと言う声がありました。

館山には、大東亜戦争時の沢山の遺跡があります。その遺跡を見学する事により、戦争とは、特攻とは、防衛とはを改めて考えていただけたのではないかと思います。

参加会員の声

会員　小長谷　丈晴

今回顕彰会に入会して初めての研修会でしたが私のような全くの民間人としては自衛隊施設見学、それも顕彰会としての研修はとてもインパクトがあり、普通では体験出来ないような内容でした。書籍などでは勉強できるものの、やはり実際に体験や見学として足で歩いて見て聞くこの研修は、他では得られない崇高なものだったと思います。今後もこのような自衛隊施設見学や旧日本軍関連の遺跡巡りがあれば是非とも参加したいと思います。学校教育では歴史の事実と違った内容を教えておりますので、真実の学びは国の将来を築いていく上で非常に重要だと思っておりますので今回参加させていただき感謝しております。顕彰会の皆様がとても親切で話しやすい方々ばかりであっという間に時間が過ぎてしまいました。知らなかったことが多く、勉強になりました。顕彰会での様々な学びをこれからの日本のために何かしたい、何か少しでもお役にたてるようにしたいと思っております。先人が命を懸けて日本を守るために散華されたのは日本国を愛していたからであり、その愛国心・郷土愛・家族愛を我々ひとりひとりが継承し、自分の国は自分で守る気概を持ちたいと思います。今後とも宜しくお願いします。

第21航空群司令と集合写真

講演会のお知らせ

（公財）特攻隊戦没者慰霊顕彰会では下記の通り講演会を行います

今回は大戦時のインドネシアのパレンバンで空挺降下をした「奥村實大尉」のご子息 奥村康大」氏がお父上の残された資料を基に講話をされます。

貴重なお話しを伺えますので多くの方のご参加をお待ちしています。

1 演題：「父を語る 空の神兵と呼ばれた男たち」
2 日時：平成29年10月28日（土）
　１３３０～１５３０
3 場所 ： 靖國会館 九段の間
4 講師 ： 奥村康大氏
5 会費 ： 無料
6 申込 ：
　特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局
（☎03-5213-4594 又は
E-mail tokuseniken@tokkotai.or.jp）
にお申し込みください

入会者のコメント

今年六月に当顕彰会のホームページからオンラインにより入会されました望月様の入会申込み時のコメントを紹介します。

望月 裕介（会員No.９２７１２）

ＧＨＱの洗脳が解け始め、戦前の日本人の感覚を取り戻したいと思っています。そうして戦争のことを調べていた中で、特攻隊の方々の精神、思いに触れ、もっと知りたいと思ったことと、彼らは日本人の誇りであると感じたので、顕彰会への参加を希望しました。よろしくお願いします。

寄付者御芳名（敬称略）

（平成29年1月1日～3月31日）

（単位千円）

一四 松本 聖二　一〇 枡田 恭典
七 宮永 春子　七 上村 貞蔵
七 加藤 寛二　五 谷垣 尚
三 郡 佳世　二 早瀬 登
二 市場 敏司　二 藤井 宏
二 三河内健作　二 平田 重夫
二 川本 修二　二 安藤 愿英
二 高瀬 宏司　二 藤本 英憲

新入会員名簿（敬称略）

（平成29年1月1日～3月31日）

北海道 梶原 榮利
福 島 杉山 惠子
栃 木 相山 正人
埼 玉 橋本 吉功　今野 秀昭
堺 直美　北田喜与志
佐々木昇　千葉 順市
安達 慎也　安達 清花
千 葉 小山 喜好
東 京 福江 広明　深見 修
SOS-JAPAN緊急SOS日本国民行動
木島 真巳　小宮さゆみ
上野 和男　上野 章子
上野 修治　横田 恵子

石川　高野　健司
静岡　望月　裕介
愛知　小笠原真清
滋賀　森　健策
大阪　殿谷　章
愛媛　土井祐貴子
福岡　樺山　由彬　山本　寛
佐賀　久我　美咲

会員訃報（敬称略）

謹んで哀悼の誠を捧げます

宮城　金子　茂平（28・9）
茨城　矢島　孝雄（29・3・24）
栃木　水谷　郷（28・10・19）
千葉　宇井　忠一（29・5・12）
東京　清水　素郎
神奈川　丸井　容子（29・3・30）
　　川井　正男（29・5・22）
山梨　山本　哲也（29・5・21）
愛知　勝田　秀男（29・2・21）
三重　小林宇三郎（29・1・20）
大阪　宇上　明夫（29・2・19）
　　田中　時徳（29・4・23）
徳島　三木　文之（29・4・11）

会員ご入会のご案内

「特攻隊戦没者に感謝と敬意を」

当顕彰会は、先の大戦の末期、一つしかない命を、祖国の安泰と家族や大切な人のために捧げられた特攻隊員に対し「あなた達のことは忘れません。有難うございます。感謝します。私たちも努力します。どうぞ安らかに！」を胸に、慰霊・顕彰を行う団体です。これにご賛同して頂ける方ならどなたでも会員にお迎えいたします。多くの皆様のご入会をお待ちしております。

○当顕彰会の主な事業
・特攻隊戦没者の慰霊顕彰（他団体への参加を含む）
・会報の発行等による特攻及び戦没者の伝承等
・特攻に関する資料の収集、調査、図書等の貸出講演会等の開催その他

○年会費
・一般会員　３０００円
・学生会員　１０００円

○
URL:http://www.tokkotai.or.jp
ＱＲコード

ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しては、次の点にご留意くださるようお願い致します。

1　原稿は、手書き、パソコン作成のいずれでも結構です。
2　記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当顕彰会にお任せ願います。
3　慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付して下さい。
4　原稿、写真等は、原則としてお返し致しませんが、必要な場合はその旨お書き添え下さい。
5　会報・機関紙、投稿記事等の送付先は、左記宛てとして下さい。

〒１０２-００７３
東京都千代田区九段北３-１-１
靖國神社遊就館内
公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会
電　話０３-５２１３-４５９４
ＦＡＸ０３-５２１３-４５９６
E-mail　tokuseniken@tokkotai.or.jp